の剣士の物語

すぴかさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不慮の事故によって記憶を全て失ってしまった桐ヶ谷和人。　怪我の治療と記憶の回復を兼ねてメディキュボイドを使用することとなる。　メディキュボイドの中で出会った少女と、治療目的でダイブした《ソードアート・オンライン》で彼は…

目次

ゴミ捨て場
～番外編・Ｓｉｌｅｎｔ　Ｎｉｇｈｔ～ ―――― 1
今更すぎる主要人物紹介～ＳＡＯ編～ ―――― 8
メディキュボイド
プロローグ～事故と記憶と少女～ 11
プロローグ～ソードアート・オンライン～ ―――― 15
Ａｉｎｃｒａｄ―アインクラッド―
～剣の世界～ ―――― 20
～討伐～ ―――― 29
～月夜の黒猫団～ ―――― 40
～記憶～ ―――― 49
～黒の魔剣士～ ―――― 56
～感情とプログラム～ ―――― 66
～重い告白～ ―――― 75
～甘い告白～ ―――― 81
～対立～ ―――― 86
～圏内事件～ ―――― 94
～幻の復讐者～ ―――― 102
～愛≠殺意～ ―――― 108

ゴミ捨て場
～番外編・Ｓｉｌｅｎｔ　Ｎｉｇｈｔ～

―２０２３年１２月２４日―

今日は１２月２４日。世間ではクリスマスイブと呼ばれる日だ。

だが、俺はあの日以来殆どソロで活動し、人との関わりを避けてきたため、一夜を共にする相手は当たり前として、パーティーをする相手も、談笑する相手すらいない。

それで暇なわけだが、外に出る気にもなれない。

今よりもっと、彼女に会いたくなってしまう気がして。

「木綿季……」

でも俺は人を求めてはいけない。折角紡いだ友情を、愛情を、絆を、全て踏みにじってしまうだろうから。

９５層を攻略するまでに茅場を”殺す”、そして”殺される”覚悟が出来なければ俺は…

友人に、愛した者達に、俺を殺せと、俺に殺されろと、言わなければいけなくなる。俺の大切な人達と、殺し合うなんて俺には出来っこない。

……静かだ。”聖なる夜”の名の通り。
街にはたくさんの人がいるはずなのにシステム的にそれらも全て遮断されているので当然なのだが。
ふと窓を覗くと白い影が無数にちらついていた。
「雪…」
思い起こせばひとりきりのクリスマスイブなど初めてだ。
いつもクリスマスには家族や友人がいて、去年も隣にはユウキがいて…
寂しい。苦しい。ユウキや、皆に会いたい。でもその感情を満たすことは”理性”が許さない。
こんなに悲しくなるくらいなら、あの時全てを話して拒絶されてしまえば良かったではないか。
そんな後悔の念が押し寄せる。
「だめ…だな……そんなこと俺が……一番良く分かってたはずなのにさ……」
でも、過ぎたことを後から悔いたって何かが変わるわけでもない。
だから今、俺にできるのはただ静かに涙を流すことだけ。
仮想世界では涙は我慢できない。ナーヴギアが感情を読み取ることで顔にはっきりと出てしまう。

だから、涙を止めようと思ったら、気持ちを切り替えることだけ。
「狩りでも……行くか」
俯き、長く伸びた前髪で涙に濡れた顔を隠すようにして宿を出た。
そして向かった。〝何か〟を求めて、
３５層・迷いの森へ。

〜〜

今日は１２月２４日、世間ではクリスマスイブと呼ばれる日。
今、ボクはアスナのホームでアスナ、そして姉ちゃんとクリスマスパーティーをしている。
……パーティーと言うには些か静かすぎるけど。パーティーというか食事会だよねぇ、これ。
本当は和人にも来て欲しかったけど、あの日以来フレンドもパーティーも解除されて、ボス戦以外ではボクの前に姿を現さなくなった。
それはアスナたちも同じのようで、唯一分かっているのがフレンド登録しているのがKoB団長のヒースクリフと情報屋のアルゴだけだということだけ。
この二人のフレンドを解除しないのは攻略に必要だったからだろう。
――ボク、嫌われちゃったのかな……

そんな考えが脳裏を過ると同時に、視界が歪む。
「……ボク、酔っちゃったから少し夜風に当たってくる」
「う、うん」
「え、ええ」
ＳＡＯでは基本的にお酒には酔わない。だから、外出する言い訳としては苦しいけどあの二人も色々察してくれているのかもしれない。
ホームに向かってとぼとぼと歩いていると路地裏から出てくる一人のプレイヤーが見えた。
その人の服装は黒を基調として、白と赤のラインが入ったコートとズボン。
そして背中には一本の黒い剣を帯びて、長い前髪で顔を隠しながら歩いている。
「和人…」
半年以上探し続けてきた桐ヶ谷和人その人だった。
ようやく会えた嬉しさに身を任せ駆け寄ろうとするが、ある異変に気が付いた。
彼は、唇を引き締め、静かに涙を流して泣いていた。
それを見て、ボクは立ち止まってしまった。
話しかけちゃいけないような雰囲気だったから。
もうひとつ、今まで気が付かなかった変化に気が付いた。

コートの肩の部分に、見慣れたマークがあった。
それは、つい数時間前…食事会が始まる直前に見た。
アスナと姉ちゃんの戦闘服にも描かれていた、十字剣のマーク。
「血盟…騎士団…？」
そう呟いた時にはもう、もと来た道を駆け出していた。
―アスナのホーム―
アスナの家の扉を勢い良く開いて中に入る。
すると、二人が笑顔で
「おかえりなさい」
と言ったので頭に血が上って強い言い方をしてしまった。
「知ってたの!?ゼロのこと！」
「え？」
「ゼロの行方を知らないって嘘だったの!?」
「待って待って、落ち着いて。最初から話して。」
そこで、はっと我に帰り深呼吸をする。ある程度落ち着けたところで話を始めた。
「……さっき街でゼロを見かけたんだ。ボクもう嬉しくって駆け寄ろうとしたんだけど、ゼロ、泣いててさ。近寄るに近寄れなかったんだけど……」

「「うん」」
「……それでボク、見ちゃったんだ。彼の肩のところに血盟騎士団のマークが描いてあるのを」
「「え？」」
「強い言い方してごめんね。二人はＫｏＢの副団長だから何か知ってるんじゃないかと思って……」
「そんな話聞いたこともないわよ…。」
「うん。新しく団員が入ったら真っ先に私たちに報告が来るはずだから……え？」
姉ちゃんとアスナが答えたけど、ウィンドウを操作しながら答えたアスナは驚いたような声をあげた。
「どうしたの？」
「こ、これ見て…」
アスナはウィンドウを可視化させ、ボクたちに見せた。
「これは…メンバー表か…え？」
そこにはしっかりと、《Ｚｅｒｏ》というプレイヤー名が記載されていた。
そして、プレイヤー名の横には銀色の王冠マーク。それが意味するのは、
「「副団長!?」」

静かな夜の街に、３つの叫び声が木霊した。
その時、何処かの黒い剣士が寒気を感じたのは言うまでもない。

今更すぎる主要人物紹介～ＳＡＯ編～

桐ヶ谷和人／ゼロ／キリト

２００８年１０月７日生まれ。母からの頼みで茅場のメディキュボイドとＳＡＯの制作に立ち会った。もう１つ作っていた物があるらしいがそれはまた先のお話。

事故で左目の瞳が赤くなりオッドアイになった上、記憶を失くしたが、とある出来事によって記憶は回復した。

そしてＳＡＯ内部ではサブＧＭ権限を持ち、それとはまた関係なく《二刀流》というユニークスキルが出現している。

自分のＨＰをレッドゾーンに達しないようにしている事以外はＧＭ権限は基本的に使っていない。

紺野木綿季／ユウキ

２０１１年５月２３日生まれ。今作のヒロイン。第１層からずっと和人と一緒にいたが、第１１層の一件で和人と疎遠になってしまうが、姉の機転で和人は２人に全てを打ち明け、結婚に至った。

《剣姫》のユニークスキルが出現している。

紺野藍子／ラン

２０１１年５月２３日生まれ。今作のヒロイン。第２５層あたりまでは和人と木綿季と行動していたが、血盟騎士団に入団、副団長という地位を得た。妹の為、暗くなってしまった和人に会う度に声をかけていた。だが、妹と同じ人を好きになって少し複雑な気分だったりもする。

妹の為に機転を聞かせて和人を煽り、全て打ち明けさせ結婚に至った。

《剣姫》のユニークスキルが出現している。

結城明日奈／アスナ

２００７年９月３０日生まれ。原作においてのヒロイン。第２５層あたりまでは和人達と共に行動をしていたが、血盟騎士団に入団、副団長という地位を得た。

一時期精神的な問題で《攻略の鬼》と呼ばれるほど怖かったが、圏内事件の影響（６割ユイの可愛さ）で棘が抜け丸くなった。

和人たちの出す甘い空気に呆れている。

茅場晶彦／ヒースクリフ

１９９２年生まれ、誕生日は不明。ＳＡＯの開発者であり、アインクラッド第１００層のボス（ラスボスとは言ってない）。

ヒースクリフの正体を知っているのは和人のみ。色々と謎多き人物。

ＧＭ専用ユニークスキル《神聖剣》が出現している。

ユイ

２０２２年７月２日生まれと、今作では設定する。和人、木綿季、藍子の娘であり、和人にプレイヤーの精神面のケアをするメンタルヘルス・カウンセリングプログラムとして作られたＡＩ。バグの影響で意志を持つようになった。

和人のことを《パパ》、木綿季は《ユウ母さん》、藍子は《ランお母さん》、そして２人一緒に呼ぶ時は《ママ》と呼ぶ。

カーディナル

２０２２年６月１５日生まれと、今作では設定する。《ＳＡＯ》の世界を制御するプログラムだが、ユイのバグをコピーして自分に写し、自我を持った。ユイのお姉ちゃん。

メディキュボイド
プロローグ～事故と記憶と少女～

――やめろ。来るな。
そう願ってもトラックは迫ってくる。
――止まれ、止まってくれ！
そう願っても止まらない。
――俺は、死ぬのか。
その瞬間、轟音とともに俺の意識は途絶えた。

「患者は桐ヶ谷和人くん14歳中学2年生、頭部を強打しており意識不明、その影響か左目にも異常がみられます。」
次に聞こえたのはそんな声とサイレンの音。
事故に遭った、それだけは覚えている。それより、桐ヶ谷和人って誰だろう？
そしてまた、意識が薄れて行く。

次に目が覚めたとき、今まで生きてきた１４年間の記憶が無かった。病院にいるということは分かったが、何故病院にいるのか、家族や友人の顔、名前、そして――――自分の名前すらも、何も覚えちゃいなかった。

記憶が無くなっていることに家族や医者たちが気が付くと、俺は別の部屋に連れていかれた。

その時、家族だという３０代くらいの女性と俺と同じくらいの女の子が何か言っていたけど、何を言っているのか良く分からなかった。

その部屋は無菌室で、中には大きなベッドと、その上に大きな機械があるＭＲＩのようで全く違う物が置いてあった。

この装置は”メディキュボイド”といい、俺の他に一人だけ、被験者がいるという。

俺はそこに寝かされると、機械を頭に装着された。

そして一言、俺は言葉を発する。

「リンク・スタート」

そして、意識は現実から離れ、仮想空間へと飛ばされる。

――それは、西暦２０２４年１１月５日の事だった。

―メディキュボイド仮想空間内・桐ヶ谷和人用プライベートルーム―

「ここ、何処だ？」

俺は気が付くと、真っ暗な空間にいた。暫くすると、色々なモニターが表示され、外の様子や、インターネット等を見れるようだ。

しかし、そのモニターの左下、良く分からないアイコンがある。そこには、

「Ｐｒｉｖａｔｅ　Ｒｏｏｍ　Ｙｕｕｋｉ　Ｋｏｎｎｏ」

と書いてあった。

「もう一人の被験者の部屋…か？」

現在時刻は午前１１時３５分。夕方の５時位までは好きにしていていいと言われたので、何もやることがない。

暇なので、行ってみることにする。向こうに都合があれば帰るとしよう。

せ

アイコンをタップすると、俺は青い光に包まれた。

―メディキュボイド仮想空間内・?????用プライベートルーム―

???ｓｉｄｅ

「ひーまーだーー！」

何もやることがない。暇、暇すぎる。明日の正式サービス開始に備えてネットサー

フィンでもしようと思ったけど、殆ど漁ってしまったので調べることもない。
「うがーーー!!!……ん?」
　急に視界の左下にアイコンが現れた。書いてあるのは、
「Ｐｒｉｖａｔｅ　Ｒｏｏｍ　Ｋａｚｕｔｏ　Ｋｉｒｉｇａｙａ」
　…きりがやかずと?
　誰だろう?メディキュボイドにはボクしかいない筈なのに…ん?
「Ｋａｚｕｔｏ　Ｋｉｒｉｇａｙａから入室希望メッセージが届きました。入室を許可しますか?」
　…暇だし、許可っと!
　その時、青い光と共に、人が現れた。
　和人ｓｉｄｅ
　青い光が収まると、そこはさっきと同じ暗い空間だった。だが、目の前に黒く艶のある髪を肩で切り揃えた1つか2つ位下であろう女の子がいた。
「初めまして。突然訪ねてすまない。俺は桐ヶ谷和人…と言うらしい。君は?」
「らしい?」
「俺、今までの記憶がなくて…それでメディキュボイドに…」
「…そっか。ボクは紺野木綿季。宜しくね、和人くん!」

プロローグ～ソードアート・オンライン～

「木綿季…か。俺の事は和人でいいよ。」
「わかった。」
「それより、君はなんでダイブしてるんだ？」
　俺は気になっていることを率直に聞いてみた。俺だけダイブしている理由を話して、向こうが話さないのは少し不公平だからな。
「…ボクはＡＩＤＳなんだ。」
「ＡＩＤＳ…後天性免疫不全症候群って奴か。メディキュボイドにいるってことは…薬剤耐性型なのか…。」
「その通りだよ。それにしても、よく知ってたね。記憶がないのに」
「確かに。最近学んだ知識とかは覚えてるっぽいんだよな。」
　本当に何故だか分からない。最近学校の授業みたいな所で学んだ知識は覚えてるのにこの身で見て、感じて聴いたものは覚えていないのか。
「そうだ和人、聞きたいんだけど」
「なんだ？」

「どうして君は左目だけ赤いの？」

――左目だけ赤い？

俺のきょとんとした顔を見てなのか、木綿季はなにか操作をし始めた。

すると、幾つかあるモニターの１つが鏡のようになった。

それを覗き込むとそこには、左目の瞳だけ赤くなっている、オッドアイの俺がいた。

「な、なんでだろうな…」

『それには僕がお答えしますよ』

声はメディキュボイドの外から、マイクで聞こえてきた。話しかけてきたのは白衣の男性。木綿季の主治医だろうか？

「えっと、あなたは？」

『僕は倉橋と言います。木綿季君の主治医で、今日から君の主治医にもなります。』

俺の主治医は別の先生だったはずだ。じゃあ何故…

『前の君の主治医の先生は機械の操作があまり得意ではなくてね。ということで、君の主治医になることになった。』

聞く前に答えやがった…心読めるのか？

『まあ、それは良いとして、桐ヶ谷くん。君に伝えたいことがあってね。』

「伝えたいこと？」

『まず、さっきも君が言っていた目の事だ。君の左目は事故で頭を強く打ったことによって遺伝子になんらかの異常が発生したようだ。』
　確かにそれなら納得だし、一番妥当な理由だろう。
「そう、なんですね。」
『ああ。二つ目は、君には明日からあるＶＲＭＭＯゲームに入ってもらうと言うことだ。』
「ゲーム？」
『名を、《ソードアート・オンライン》。通称《ＳＡＯ》。』
「ＳＡＯ…」
『ええ。そして、貴方はβテスターだったとの事ですので、その時のＩＤとパスワードを教えておきます。ＩＤは……』
　倉橋先生がＩＤとパスワードを教えてくれた。ＩＤこそ使うが、当時のアバターを使うつもりは更々ない。何故なら今の俺はその時の俺ではないから。
「ありがとうございます。倉橋先生」
『はい。ではまた。』
　そういって倉橋先生は出ていった。そういえば…
「倉橋先生、俺が木綿季のところにいること何も疑問に感じてなかったみたいなんだが

…」

「確かに。分かってたんじゃないかな？」

「さあな」

俺達は一通り話して、その日を終えた。

記憶を無くしても、楽しく話せる仲間ができて俺は正直嬉しかった。

―２０２２年１１月６日　ＰＭ．０：５９―

――あと一分。あと一分で始まる。

目の前にあるＳＡＯのアイコンをタップして、『ログインしますか？』という画面を表示させてその時を待つ。

そして午後１時になった。その瞬間、俺は『ＹＥＳ』のボタンを押す。

キャリブレーションはメディキュボイドに入ったときに済ませてあるからスルー。

脳波や五感等のチェックもクリア。そして、ＩＤとパスワードを入力すると『βテスト時のデータを使用しますか？《Ｋｉｒｉｔｏ（Ｍ》』との表示。

これはＮＯだ。ただ、この（Ｋｉｒｉｔｏ）というプレイヤー名は忘れないようにしよう。

そして、アバターの設定をする。アバターは俺自身に限りなく近くした。ただ、左目を赤から黒にはしたが。

最後にプレイヤー名の設定。これはもうＳＡＯにダイブするとなったときから決めていた。

表示されたキーボードを叩き、《Ｚｅｒｏ》と入力する。

大半の記憶を失くし、ゼロから始める俺には丁度良い。

そして俺は《ソードアート・オンライン》にログインした。

――Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｓｗｏｒｄ　Ａｒｔ　Ｏｎｌｉｎｅ!!!――

Ａｉｎｃｒａｄ―アインクラッド―
～剣の世界～

―２０２２年１１月７日１３時０２分―

「ここが、浮遊城アインクラッド…」

俺が目を開けると、そこには大きな広場があり、その周りには中世ヨーロッパ風の町並みが並んでいた。

記憶にはないけれど、懐かしい感じはする。

さて、ここからどうするかだが…

「かーずとっ！」

「木綿季…」

リアルの名前で声をかけられ、振り向くとそこには俺と同じでメディキュボイドに入っている紺野木綿季がいた。ただ、メディキュボイドの中と違って髪は長かったが。

「ここでは俺は《ゼロ》だ。周りに人がいるときはそう呼んでくれ」

「分かった。ボクはこっちでも《ユウキ》だから宜しくね」

「了解」

ユウキとも会ったし、フィールドに出てみるか。
「ユウキ、フィールドに出てみないか？」
「お、いいね！行こう！」
俺達はフィールドへ向かうため走り出した。大通りに出て、細い路地裏に入り、曲がって、また大通りに出て…覚えてない筈なんだけどな…
「ねえ、ゼロ」
「ん？」
「なんで道覚えてるの？記憶がないはずじゃ？」
「なんとなくだよ。なんて言うか…懐かしい雰囲気がする方に行ってるみたいな」
「ふぅん…」
取り敢えずユウキは納得してくれたらしい。ここ、アインクラッドで何か切っ掛けさえあれば記憶は…
「そこの兄ちゃんたちちょっといいか！」
考えに耽りながら走っていると後ろから声をかけられた。振り向くと趣味の悪い赤いバンダナにピンクの髪の毛、そして顎髭を備えた男がいた。
「なんだ？」
「その迷いの無い走りっぷり、あんたたちβテスターじゃないのか？」

確かに俺はβテスターだ。だが、記憶を失っていてほぼ初心者同然。ここは…
「悪い、俺はβテスターじゃ…」
「俺はβテスターだよ。」
クラインの更に後ろから声がかかる。
みると青い髪のイケメンの男だった。
「あんたは？」
「俺はディアベル。βテスターを探しているってことはレクチャーをしてほしいとかそんな感じかな？」
「ああ、その通りだぜ！俺はクラインだ！」
「俺はゼロ」
「ボクはユウキだよ！」
「なら、君たちさえ良ければパーティーを組まないかい？レクチャーはするよ」
「勿論だ！願っても無いからな。お前らは？」
「お願いするよ。」
―第一層フィールド―
「おわぁ!!ま、股ぐらが…」
「おいおい、仮想世界なんだから痛みはないだろ？」

「あ、そっか」

クラインが猪に吹き飛ばされ、股ぐらを抑えているが、俺が痛みはない、と突っ込む。

「ゼロくんとユウキさんは筋がいいね。クラインさんはもう少し練習しよう。カタナだから少し難しいけど、こう、それぞれの技のモーションをとってスキルが立ち上がる感じがしたら体を動かす感じで。」

「モーション…モーション…」

俺とユウキは既にこの世界に存在する剣技、ソードスキルを使えるようになっていた。俺は覚えていなくても体に染み付いているから自然に放てたし、ユウキは完璧に感覚派だからコツをつかむとすぐにできるようになっていた。

すると、不意にクラインが肩に担いだ刀がきゅいいいいいん――という音と共に光を帯びる。

「うおりゃーーーー!!!」

クラインが体を動かすと目の前の猪――フレンジー・ボアを刀が貫き、ポリゴン片させた。

「おめでとう。といってもこの猪、某有名ＲＰＧで言うところのスライムレベルだけどね。」

「うえっ、マジかよ。俺ぁ、てっきり中ボスくらいかと…」

ディアベルがそう言うと、クラインはがっくりと肩を落とした。
「そういえばスキルってよ、武器を作ったりするのとか色々あんだろ？」
「そうだね。スキルの種類は無数にあると言われてる。その代わり、魔法はないけど…」
「ＲＰＧで魔法なしたぁ、大胆な設定だよな」
「そうだね。じゃあ、次行こうか。」
「「おう！」」
―同日１７時２０分―
「何度見ても信じられないよね。ここがゲームの中だなんて。」
「だよなぁ。作った奴は天才だぜ。この時代に生まれて良かったぁ…」
「大袈裟だな」
確かに大袈裟だが、一理はある。ただ楽しむだけじゃなく、俺とユウキみたいに治療にも使えるのだから。
そんなことを考えていると、急にクラインが叫びだした。
「って!!もうこんな時間じゃねえか！俺は一回落ちるわ！」
「飯か？」
「ああ。５時半アツアツのピザ頼んでんだ！」
「準備万端だね」

「おう、じゃあな…あれ？」
「どうしたの？」
「ログアウトボタンがねえ。」
「そんなはずないよ。メインメニューの一番下に…ないな。」
「俺（ボク）もない。」
「おかしいぞ…」
「何がだ？」
「確かに。こんなの今後の運営に関わる一大事だ。なのにアナウンスも強制ログアウトも何もない。」
「そうだよね…ディアベルの言う通りだよ…」
その時、何処からかゴーンゴーンという鐘の音が聞こえた。それと同時に俺達四人は青い光に包まれる。
「「「うわああ!!」」」
―同日１７時３０分―
気が付くと、俺達がこの世界に来て一番最初に来た場所…始まりの街の広場にいた。
周りは混乱に陥っている。
「おい、上！」

と、誰かが叫ぶとほぼ全員が上を向いた。
そこには、赤いシステムメッセージで
《ＷＡＲＮＩＮＧ》《Ｓｙｓｔｅｍ　Ａｎｎｏｕｎｃｅｍｅｎｔ》
と表示されていた。
そして、そこから血のような赤い液体がダバダバと流れ出て、ローブを着たの人の形を型どった。
「なんだ、ありゃあ…」
クラインが呟くと、そのすぐ後に赤いローブが話し始めた。
『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ。』
「…私の世界？」
「私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ。」
周囲の人物たちは「本物だ！」等と言っているが、茅場の声はとても低く冷たい。
これは、何かある。
「プレイヤー諸君は既にメインメニューからログアウトボタンが消えていることに気が付いていると思う。しかし、それはゲームの不具合ではない。
繰り返す。不具合ではなく《ソードアート・オンライン》の本来の仕様である。」
「仕様…？」

「諸君らは自発的にログアウトすることはできない。また、外部の人間によるナーヴギアの停止、解除もありえない。もしそれが試みられた場合、ナーヴギアが発する高出力マイクロウェーブが諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる。」
「何言ってんだあいつ。頭おかしいんじゃね？なあ、ゼロ、ディアベル、ユウキ」
「いや、信号素子のマイクロウェーブは電子レンジと同じだ。リミッターさえ外せば人間の脳の限界の４２℃なんて簡単に…」
「じゃあ、電源を抜くとかは？」
「いや、ナーヴギアにはバッテリーがあったよ。」
「残念ながら現時点で、プレイヤーの家族・友人が警告を無視してナーヴギアを強制解除しようとした例が少なからずあり、結果、２１３名のプレイヤーがアインクラッド及び、現実世界から永久退場している。」
「２１３人も…!!!」
「信じねぇ！信じねえぞ俺は！」
　ここにいる殆どの人間はクラインと同じ考えだろう。しかし茅場はそれを認めさせるように現実のニュースが書かれているモニターを開く。
「ご覧の通り、多数の死者が出たことを含め、あらゆるメディアが繰り返し報道している。よって、すでにプレイヤーがナーヴギアを強制解除される心配は低くなっていると

言っていい。諸君らは安心してゲームクリアに励んでくれ。」
「しかし、十分に留意してもらいたい。今後、このゲームにおいてあらゆる蘇生手段は機能しない。ＨＰが《ゼロ》になった瞬間、諸君らのアバターは永久に消滅し、同時に――諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される。」
それからは殆ど覚えていない。
気がついたときには俺はユウキとディアベルと、ホルンカという街の宿屋にいた。
俺もユウキもディアベルも現実の姿に戻っていて、驚いたが。
デスゲームになって本当なら恐怖に陥っても仕方ないはずだが、俺の気分は高揚していた。
俺はこの状況を楽しんでいる。
――俺ってとんだ戦闘狂だな。
そう思いつつ、今日は床につくことにした。

～討伐～

ゲーム開始から1ヶ月が経ち、その間に２０００人が死んだ。
あれから俺はディアベルと別れ、ユウキと行動を共にしていた。
そして、今日。ディアベルのパーティーが第一層のボスの部屋を発見、討伐会議が開催されることとなった。
―１２月２日１６時３０分　トールバーナ―
トールバーナの街のとある広場に、ぞろぞろと剣や斧、槍などの武器を持った人々が４０人ほど集まってきた。
広場の中央で立っていた青髪の青年はメンバーが揃ったのを確認すると、声を上げて会議を開始した。
「はーい！それじゃあそろそろ始めさせてもらいまーす！今日は、俺の呼び掛けに応じてくれてありがとう！俺はディアベル！職業は、気持ち的に『騎士（ナイト）』やってます！」
ディアベルがそう言うと、周りでは笑いが起こった。
同じパーティーメンバーと思われる奴らは「この世界にジョブシステムなんてないだろ！」等と野次を飛ばしていた。

　そんな明るい雰囲気で始まった会議を、ディアベルは唐突に空気を引き締めさせる。
「皆をここに呼んだのは他でもない。今日、俺達のパーティーがあの塔の最上階でボスの部屋を発見した。」
　今度は周囲にざわめきが起こる。
「俺達はボスを倒し、第二層に到達して、このデスゲームをいつかきっとクリアできるということをはじまりの街で待っている皆に伝えなくちゃならない！それが、この場所にいる俺達の義務なんだ。そうだろ、皆！」
　今度は周囲が喝采を起こす。このディアベルという男は、持ち前のコミュ力で場の空気をこう自由に変えられるのだから俺にとっては尊敬に値する。
　しかし、次の言葉で俺は絶望の底に落とされる。
「先ずは、６人のパーティーを組んでみてくれ」
　――はぁ!?ゆ、ユウキは着いてきてくれるとして、あと四人は…
「ゆ、ユウキは着いてきてくれるよな？」
「当たり前でしょ？」
　笑顔で返された。良かった…
『あれ？貴方、もしかして木綿季？』
「はい？…え!?姉ちゃん!?」

後ろから声をかけられたと思ったらユウキに良く似た女の子だった。
その女の子はユウキの双子の姉らしい。
「もし良かったら私もパーティーに入りましょうか？」
「い、いや！是非頼む！そうだ、あと３人！」
辺りを見回してみると、フードを被った人が左にいた。
「君も、溢れたのか？」
「溢れてない。周りがお仲間同士みたいだったから遠慮しただけ。」
――それを溢れたって言うんだろ…
思ったが口にしなかった。理由？怒ったら怖そうだから。
「な、なら俺達とパーティー組まないか？今回だけの暫定だ。」
頷いたので俺はパーティー申請をする。
《Ａｓｕｎａ》と言う名前が出てきた。名前と服装からして恐らく女性だろう。
その後ボスの攻略法や注意点等が話され、その日は解散となった。
ボス攻略は明後日…１２月４日に行われることとなった。
解散したあと、俺とユウキのお姉さんは自己紹介しあうことにした。
「じゃあ、貴方が二人目のメディキュボイド被験者の桐ヶ谷和人さんなんですね？」
「ああ。この世界では《ゼロ》だけどな。…ユウキと違って、そこまで重病って訳じゃな

いが。藍子さんは？」
「呼び捨てでいいですよ。あと、この世界では《ラン》。私は、ＳＡＯが始まったその日にメディキュボイドを使い始めたんです。」
　メディキュボイドを使う。つまり、そういうことなのだろう。
「そうなのか…」
「えっ!?聞いてないよ！」
「そりゃ、ユウキたちがＳＡＯに入った直後に使い始めたからね。」
「そっか、あっ！」
「あれ、アスナさんですね。」
　見ると、そこには先程、解散するとそそくさと何処かにいってしまったアスナが、花壇の縁に座って黒パンをかじっていた。
「隣、いいか？」
　アスナは何も言わないが、無言を肯定ととって隣に座る。アスナには少し離れられたが。
「それ、結構美味いよな」
「本気でそう思ってる？」
「ああ、この街に来てから1日1回は食べてるよ。少し工夫はするけど。」

「「工夫？」」
「ああ、あれか。」
「ユウキ、ラン」
「こんばんは、アスナさん。」
「…どうして私の名前を？」
　ランが挨拶をすると、アスナは怪訝そうな顔をした。
「自分の視界の左上に自分以外の名前が見えるだろ？それが俺達の名前だ。」
「ゼロ…ユウキ…ラン？これがあなたたちの名前？」
「ああ。俺がゼロ。こっちがユウキとランだ。」
「よろしくね。」
「そういえばゼロさん。工夫、というのは？」
　おっと、忘れるところだった。
「ああ、黒パンにこれ使ってみろよ。」
　アスナ、ラン、ユウキ、俺の順番で使っていく。
　俺が使ったあと、耐久力が切れたのか瓶はポリゴンとなって四散する。
　瓶の蓋部分をタップすると、指先が青白く光るので、それをパンに塗るようにすると
…

「クリーム？」
「ああ、食ってみろよ。美味いぞ。」
　俺とユウキが先に食べていると、２人が恐る恐る口に運ぶ。
「「美味しい」」
「だろ？」
「でしょ？」
　なんということでしょう！パサパサボソボソしていた黒パンがクリームを塗っただけでヨーグルト風味の田舎ケーキに早変わり！
「こんなもの何処で？」
「前の村で受けられる《逆襲の雌牛》ってクエストで手に入るよ。わりと簡単だからやってみたらどうだ？」
「気が向いたらやるわ」
「私もですねぇ」
「そっか」
「じゃあ、これ食べたら今日は解散にしよう！明日陣形とかの練習と話し合いをして、明後日の本番に望もう！」
「「おう！」」

―12月5日迷宮区　ボス部屋前―

「俺から言うことはたった1つだ。勝とうぜ!!」

「「「「「おうっっ！」」」」」

ディアベルの言葉に、攻略組のほぼ全員が気合いを入れる。

そして、扉を開いて部屋の奥。そこに《イルファング・ザ・コボルドロード》と取り巻きの《ルインコボルド・センチネル》がいた。

攻略組とコボルド組、双方が同時に駆け出し、ぶつかった。

俺達溢れ組はセンチネルの担当だが、ディアベルが俺達の力量を知っているため、いざとなったら前衛に出てもいいことになっていた。

だが、ディアベルの指揮は凄まじいもので、コボルドロードのＨＰはどんどん減っていった。

そして、ボスのＨＰがレッドゾーンに入ったとき、ボスが武器を投げ捨て、背中にある武器に手をかけた。情報通りならここで曲刀を出してくるはずだ。

「みんな下がれ！俺が出る！」

ディアベルが一人前に出た。だがここは、パーティーメンバー全員でかかるのがセオリーのはず。――まさか。

そして、ふとボスが抜きかけている武器を見ると明らかに曲刀ではなかった。
――タルワールじゃない！情報と違う！
「ディアベル！武器が違う！全力で後ろに跳べええええええええ!!!」
叫んだがもう遅かった。ディアベルは既にソードスキルを発動させてしまい、もう攻撃をするしかなかった。
そこに情報と違う武器の――《野太刀》と呼ばれる武器での攻撃が始まった。
カタナ重範囲攻撃技《旋車》。
それが、ディアベルを襲おうとした途端、世界が止まった。いや、途徹もなくスローモーションになったと言うべきか。
そんなことも気にせず、俺は駆け出す。
そして、射程内に入った瞬間、片手剣突進技《ソニックリープ》を使って更にスピードを上げて一気に間合いに入る。
その瞬間、世界が動き出した。
なんとか《旋車》をパリィすると、叫ぶ。
「ユウキ、スイッチ!!!――――うっ」
「……っ！うん！」
呆然としていたユウキだが、その叫びによって意識が戻り、駆けてくる。

そして、アスナも同様に駆けてきた。
ユウキが片手剣水平斬２連撃技《ホリゾンタル・アーク》を発動させ、確実にダメージを与えた。
「アスナ、スイッチ！」
「はぁぁぁぁっ！」
アスナの《リニアー》で更に大きくコボルドロードのＨＰが削れるが、残ってしまった。
「ランさん、スイッチ！」
「はいっ！」
ランもユウキと同じ《ホリゾンタル・アーク》だ。だが、これでも数ドット残ってしまう。次で止めは刺せるだろうが、やはりボスなのだ。
「ゼロさん、スイッチ！」
「うおおおおおっ!!!」
止めに《バーチカル・アーク》を確実に入れたところでボスのＨＰは全損、ポリゴンと化した。
空中には《Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ!!》の文字と、俺の目の前に出現したウィンドウには《Ｙｏｕｒ　ｇｅｔ　ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ａｔｔａｃｋ　Ｂｏｎｕｓ！》の

文字。
　ＬＡのアイテムは《コートオブ・ミッドナイト》という防具のようだ。
「「「「うおおおおおっ!!!」」」」
　場は歓喜に包まれた。デスゲーム開始から１ヶ月かけ、漸く第一層をクリアできた喜びだ。
　その中で、俺は集団の隅で息を切らしていた。
　そこに近づいてくる５つの影。
「やったね！ゼロ！」
「お疲れ様」
「お疲れ様でした」
「見事な剣技だった。Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！この勝利はあんたのもんだ！」
「すまなかったな、ゼロ君。迷惑をかけてしまって。」
　上からユウキ、アスナ、ラン、エギル、ディアベルだ。
　５人とも称賛の声をくれたが、ランが怪訝そうな顔をしている。
「それはそうと、なんですか？さっきの。」
「さっき？」

「ディアベルさんを助けにいったときの瞬間移動？みたいな？」
その言葉に、他の攻略組メンバーも黙ってこちらを向いた。
正直言って、あの時何か特別なことをしたかなんてよくわからないので、曖昧に答えておく。
「いや、よく分からないんだ。気づいたらディアベルの前にいた、というか…」
とりあえず適当な言い訳をしてやり過ごす。
それより俺は早く横になりたい衝動に駆られているのだ。何故なら――
「…とりあえず俺は先に行く。第二層のアクティベートはやっておくよ。ユウキ、アスナ、ラン、行くぞ」
そして、俺は入ってきた方とは反対側の扉へ向かう。
歯を噛み締め、事故で赤く染まった左目を大きく見開き、あるはずのない痛み――激しい頭痛に耐えながら。

～月夜の黒猫団～

―２０２３年４月８日第１１層　タフト―

「我ら月夜の黒猫団に、乾杯！」

「「「乾杯！」」」

「そして、命の恩人ゼロさんに、乾杯！」

「「「乾杯！」」」

「か、乾杯…」

困ったことになった。

今日はユウキが用事で外出しており、暇だったので一人で中層の迷宮区で素材集めをしていたのだが、そこで沢山のモンスターに囲まれている集団を発見して助けた。

それが、今一緒にいる『月夜の黒猫団』だ。

ちなみに、アスナとランは『血盟騎士団』というギルドに入り、ディアベルは『聖竜連合』というギルドを率いていて、今は俺とユウキでコンビを組んでいる。

黒猫団のメンバーはケイタ、テツオ、ササマル、ダッカー、サチの５人。中層ギルド

じゃレベルは高い方だった。
「失礼ですがゼロさん、レベルは幾つくらいなんですか？」
「…レベルは今４５だ。」
「僕たちの倍くらいあるんですね…と言うことは攻略組なんですか？」
「ケイタ、敬語はやめにしよう。一応、攻略組をやらせてもらってるよ。」
隠す理由もないし、包み隠さず話した。
これで面倒ごとにならないと良いのだが…
「迷惑だったら断ってくれても良いんだけどさ、黒猫団に入らないか？今前衛ができるのがメイス使いのテツオしかいなくてさ。サチを盾持ちの片手剣に転向させようと思ってるんだ。でも勝手がわからないみたいで、コーチして欲しいんだ。」
――フラグ回収が早すぎる。まあ、取り敢えずユウキに確認だな。
「…取り敢えず相棒に確認するから待っててくれ」
ユウキには黒猫団の件で手伝ってもいいか確認のメッセージを送る。すると１分もしないうちにユウキから、
「手伝うのは良いけど、それでも前線から離れるのは一週間程度にしよう。ボクも今そっちに行くから待ってて」
と返ってきた。

「えっと、俺も一応攻略組だし、ギルドに入るのは無理だ。手伝うだけなら良いけど、前線から離れられるのは一週間程度。それと、今から俺の相棒がこっちに来るらしい。」
「そっか…分かった」
「…ごめんな」
　ケイタは一瞬悲しそうな顔をしたが、渋々了承してくれた。
　それから5分ほどして、酒場に一人の女性…俺の相棒が入ってきた。
「お待たせ、ゼロ」
「おう。紹介するよ。こいつは俺の相棒のユウキ。で、こっちは月夜の黒猫団のケイタ、テツオ、ササマル、ダッカー、サチだ。」
「ユウキです！皆、よろしくね」
「「「「よろしく!!」」」」
　―４月１３日午後２２時３２分　２８層フィールド―
　俺とユウキは黒猫団に指導を続けており、黒猫団のレベルも上がって、攻略組への仲間入りも夢ではなくなって来ていた。
　その中で俺とユウキは、こうして夜の空いた時間に最前線のフィールドにレベリングをしに来るのだ。
　この４日で俺たちのレベルも勿論上がっており、俺は４８、ユウキは４５になってい

た。

粗方狩り尽くし、再湧出するのを待っている間、気がかりになっていたことをユウキに聞いてみる。

「どう思う？ユウキ」

「何が？」

「サチのことだ」

「ああ…サチに前衛は無理だよね…びびって目を瞑っちゃってるし。出来るなら生産職の方に回ってもらった方が良いんだけど…」

俺もユウキと同じ考えだ。サチは恐怖を拭いきれておらず、攻撃をするときと防御をするときに目を瞑って隙ができてしまっていたのだ。

だが、その事に黒猫団の他のメンバーは誰も気づいていない。その上、サチは周りに気を使って遠慮してしまっている。これが問題なのだ。

「だよなぁ…ん？」

メッセージが届いた。確認するとケイタからのようだ。内容は――

「ユウキ！サチがいなくなったらしい！探しにいくぞ！」

「えっ!?う、うん！」

俺は追跡スキルをセットし、対象を設定する。

サチはとある水路の奥にいた。そこで蹲って顔を伏せている。
「サチ」
俺たちに気がついたサチは顔を上げてこちらを見た。
その顔はとても暗いものだった。
「ゼロ、ユウキ…」
「皆心配してるよ？」
ユウキはなるべく笑顔でそう言ったが、サチは逆に俯いてしまった。
俺たち二人がサチから少し離れたところに座るとサチは話を始めた。
「ねえ、私逃げたい……」
「？」
その一言に俺たちは疑問符を浮かべる。それに気付いたのか、元々言うつもりだったのか、口を開いた。
「この街から、モンスターから、黒猫団の皆から……ソードアート・オンラインから」
「そ、そ、それはまさか……心中？」
ＳＡＯから逃げようと言われたらそう思うのも当然だ。でもユウキの目の前でそんなことを…
「それもいいかもね…」

「サチ!!」
　ユウキが今まで見たことのない剣幕で怒鳴り付けた。しかし、サチは動じず、
「ううん、嘘。その勇気があるなら最初から街に閉じ籠ったりしないよね。私、死ぬのが怖い。」
「大丈夫、君は死なないよ。君も黒猫団の皆も安全マージンも十分とってるし、嫌なら無理に前に出る必要もない。それこそ生産職だっていいじゃないか。」
「本当に？本当に私は死なない？」
「死なないよ。いつかボクたちと一緒に現実に帰ろう。」
「……うんっ」
　そして、ケイタ達に連絡を入れ、俺たちは宿屋にサチを送っていくことにした。
　その後ケイタたちと合流すると、ケイタは今日の狩りでギルドホームが買えるコルが貯まったと話した。
　次の日に家を買いにはじまりの街に転移していくケイタを見送った後、俺たちは家具を買うためのコルを稼ぎに２７層の迷宮区に行くことになった。
　俺とユウキはいつもの狩り場で良いのではないかと提案したが押し切られてしまった。
　２７層迷宮区はトラップが多い。そのため攻略組からも犠牲者が出たことがあった

が、安全マージンは十分とれているし、大丈夫だろう、という判断をして引き下がってしまった。

「お、隠し扉…トレジャーボックスだ！うひょー！」

俺たちは隠し扉を発見し、開けて中を覗くと宝箱があった。

しかし、ここに隠し扉があったような覚えはない。

「ユウキ、こんなところに隠し扉なんてあったか？」

「いや、なかった……っ！」

ユウキも事の重大性に気づいたのか息を飲む。

「ダメだ！その宝箱を開けるな！」

しかしもう遅かった。宝箱は既に開けられており、部屋が赤く光って警報が鳴っている。

入り口は閉じられており、結晶も使えず、モンスターがどんどん湧いてくる。

「皆！部屋の中央に集まれ！俺とユウキでこいつらを片付けるから、溢したやつを頼む！」

黒猫団を部屋の中央にやり、俺とユウキは上位剣技を惜しみ無く使っていく。

エネミーは着々と数を減らし、残り数体となったところで、黒猫団が２体のゴーレムに苦戦しているのが見えた。

――ズキッ

頭に痛みが走るが、構わず駆け出す。

――ズキッ

痛みが増す。だが、駆けるのはやめず、ソードスキルを打ち出す体制に入る。

「うおおおおおっ!!!」

片手剣重突進ソードスキル《ヴォーパル・ストライク》。

一撃必殺の突き技で2体一気に倒そうとした。

しかし寸前、世界から色が抜け落ちた。

すると、黒髪の中学生くらいの少年が小学校に入ったかどうかの子供を突き飛ばす映像が目の前に重なった。

道路にはサッカーボールが転がっており、黒髪の少年のすぐそこには――――――トラックが。

そして、世界が再び動き出す。

2体のゴーレムがポリゴンと化すと同時に、今まで生きてきて、記憶を失う前も恐らく体感したことのないであろうほどの頭痛が、俺を襲う。

「がああああああっ!!!」

叫び、剣を取り落とし、頭を押さえ、膝をつき、呻く。

　痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいたいイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイたいいたイいタいイたイ痛イイタイいたい――――

「うっ、ああああ」

「っっ！和人!!!」

　誰かに本名を呼ばれた気がしたが、それが誰かは分からない。

　俺の意識はそこで無くなった。

～記憶～

２７層迷宮区にあった隠し扉の先はトラップで、ボクたちは今、幾つか上の層のレベルのモンスター達に囲まれてしまっている。

黒猫団の皆を部屋の真ん中に集めてボクとゼロで上位剣技も惜しみ無く使って戦っているけど、数が多すぎてどうしても何体か溢してしまう。

自分の分を全部片付けて振り替えると溢したゴーレム２体に黒猫団が苦戦していて、そこにゼロが走っていくのが見えた。

ゼロがヴォーパル・ストライクを使ったからもう安心だ。

そう思ったのも束の間だった。

剣先がゴーレムに当たる寸前、ゼロの顔が歪み、綺麗な赤い瞳を持った左目は大きく見開かれた。

「がああああああっ!!!!」

ゴーレムがポリゴンとなると同時にゼロは剣を取り落として膝をつき、頭を抱えて叫んだ。

黒猫団の皆もボクも、何が起きたのか全く分からず、呆然としていると、

「うっ、あああ…」
――ドサッ
ゼロが呻き、倒れた。
「あっ……和人!!」
慌てて抱き起こすけど、和人の意識はなかった。
「死なないで!死なないで!死なないで!」
パニックになって揺さぶったりしてみるが和人の意識は戻らない。
そこで、話しかけてきた人物がいた。
「大丈夫だよ、ユウキ。アバターが消えてないから死んじゃいないよ」
ケイタだ。そうだ、この世界で死んだらポリゴン片となって消滅する。
動揺のあまり、その事を忘れてしまっていた。
取り敢えず、和人を連れて宿屋まで帰ったけど、その日、和人は意識を戻さなかった。
一晩寝れば元に戻るだろう。そう思って明日に期待するが、次の日も、また次の日も、和人の意識は戻ってこなかった。
――和人…早く戻ってきて…

――和人の昏睡状態は一週間続いた。目を覚ましたことにユウキと黒猫団のメン

バーは喜んでいたが、それは関係と日常の崩壊に過ぎなかった。

「う、ぅうん…ここは…」

体を起こすとそこは4日間泊まっていた宿屋の一室だった。

置いてある荷物からして恐らくユウキの部屋だ。

メニューを開いて現在時刻を確認すると

《２０２３／４／１９（Ｗｅｄ）１２：１６》

と、表示されていた。

――俺、一週間も眠ってたのか…

そう思いながら、今までの事を思い出す。

――1週間前、黒猫団と隠し部屋に閉じ込められて俺は頭痛で倒れたと。うん、覚えてる。それから……そうだ、俺…

その時、部屋のドアが開いた。

艶があって紫にも見える黒い長髪に赤いカチューシャリボン、紫を基調とした戦闘服

――ユウキだ。

ユウキは両目を大きく見開き、涙目になりながら体をプルプルと震わせた。

「…おはよう、ユウキ。心配かけてごめんな」

「か、か、か、」
ユウキが何か呟いている。俺が頭の上に?マークを浮かべると、
「かずとーーーーーっ!!!」
「ぐふっ!」
俺の胸にダイブしてきた。
俺は受け止めきれずに後ろに倒れてしまい、ユウキに押し倒される体制になってしまった。
「心配したんだよ!?……何か、思い出した?」
ユウキは何かに勘づいたのか急に空気を引き締めて聞いてきた。
「どうして?」
「いつもと雰囲気が違うっていうか…それとこの間のあれが関係してるのかなって」
「…ああ。事故直前の事が思い出せたよ。」
――これは紛れもない嘘だ。本当はほとんど全て思い出していた。
けれど、こんなことを言ったら俺は――
―２０２１年６月　桐ヶ谷邸―
２年半ほど前、この家の本当の家族ではないと知った時から、俺は家族とどう接していいのか分からず距離を置いてしまっていた。

それでも父さんや母さんは前と変わらない態度で接してくれているし、妹の直葉も俺と仲良くしようと接してくれている。

――が、俺は人を疑う癖がついてしまい、次第に学校でも必要最低限の会話しかしなくなり、終いには学校とご飯の時以外は自分の部屋に引きこもるようになっていた。

だが、俺にも趣味はあった。オンラインゲームとプログラミング、そして家にあるガラクタを使った物作り。

それを2年半、ずっとやっているので技術もかなり上がって、プログラミングでは某リンゴ社の何でも教えてくれるＡＩと同レベルのものが作れるようになったり、物作りの面ではＡＩを利用した家の空調をスマホから自由に遠隔操作できる仕組みも作ったりした。

そんな日常の最中、家にある人物が訪ねてきた。

その人物の名は、

――――茅場晶彦。

聞いたところによると茅場はあるゲームを作ろうとして行き詰まり、俺の母さんに相談して、俺の事を紹介されたようだ。

母さんはかなり名の売れた雑誌編集者で、茅場…というよりアーガス社にツテがあったようだ。

茅場さんからの依頼は、《Ｃａｒｄｉｎａｌ　ｓｙｓｔｅｍ（カーディナル・システム）》の一部との作成と、モンスターや武器、技などのアイデアを出すのを手伝って欲しい、とのことだった。

俺はそれを快く了承し、カーディナルの一部を作成、そして、色々なアイデアを出していった。βテスト時点でのステータススキルの約１／４とソードスキルの約１／７、モンスターの約１／５は俺がアイデアを出したものだ。

これを半年で完成させ茅場さんに全て提出し、そのまた半年後の７月、そのゲームのβテストが開始された。

そのゲームのタイトルは《ソードアート・オンライン》。

βテスト中はとても楽しかった。偽りの身体で、現実のコミュ症を発することもなく、自由に剣を振るえた。

βテストが終わって２ヶ月後の２０２２年１１月２日。俺はあと４日でＳＡＯの正式サービスが開始されることに浮かれていた。

漸く自分の努力が形になるのだと。

――だが。

公園からサッカーボールを追いかけて飛び出してきた少年を庇い、俺はトラックには

ねられ記憶を失った。
それから3日後の11月5日に目を覚ました俺は、メディキュボイドで治療することになった。
そして、その治療で使うソフトが《ＳＡＯ》だったわけだが、俺は何も覚えちゃいなかったので、どんなところなのか、という興味しか無かった。
そしてログインしたあとの茅場さんからのデスゲーム宣告――――――

今ここで記憶を取り戻したところで死んだ約２５００人は帰ってこない。
俺は間接的に２５００人もの人間を殺し、そんな中でのうのうと生きている。
なら、俺がやることはもうひとつだけだ。
――木綿季には、もう会えない。
俺はユウキに事故直前のことだけ話し、部屋を出て、自分の部屋に戻った。

次の日の朝、部屋に彼の姿は無かった。
ゼロ――桐ヶ谷和人は、紺野木綿季と月夜の黒猫団の前から姿を消した。

～黒の魔剣士～

―２０２３年４月２０日　血盟騎士団本部―

「君が来たということは、全て思い出したという事でいいのかな？ゼロ…いや、キリト君。それとも和人君と呼んだ方がいいかな？」

「何でもいいさ。久しぶりだな、ヒースクリフ…いや、茅場さん」

「…私を殺すかい？」

「いや、今の俺だとレベルも足りないし第一、面白くない。だが、俺は――――――だ。それまでにはあんたを倒すさ。」

「ほう、ではどうしてここに？」

「それは、俺を――――――」

―２０２４年２月２３日　第３５層　迷いの森―

「ピナ！ピナ！ピナァ！」

ピナが死んでしまった。私を庇って。

私の油断と慢心のせいで。

私を囲っていた３体のエネミーが動き出した。

――私死ぬんだ。

そう思った瞬間、３体のエネミーが同時に爆散した。

その跡に立っていたのは黒い髪に虚ろで光の無い黒い右目。黒に赤いラインの入った物に統一された装備、そして左目に眼帯をしている男性だった。

――今更だけど名前だけＫｏＢに入るってのもメンバーに悪いよなぁ…

俺がユウキ達の前から姿を消し、１年が経とうとしていた。

姿を消した後、俺はすぐに茅場の元へ向かい、名前だけ血盟騎士団に入ることとなった。その事を知っているのはアルゴと茅場の二人だけだ。

フレンドはアルゴと茅場以外は全員解除し、攻略以外では出来るだけ知人の目につかないようにした。

理由？そんなの決まってる。仲の良かった人に糾弾され、距離を置かれ、下手すりゃ殺される。

そんなことになるくらいなら自分から離れた方がいい。つまりは、逃げたのだ。

――はは、そんなことされて当然の事をしてるってのに逃げるなんてな…。情けない。

俺が物思いに耽っていると、

『ピナ！ピナ！ピナァ！』
と、叫び声が聞こえてきた。
見ると、１２～３歳くらいの女の子が３体のドランクエイプに囲まれていた。
《ヴォーパル・ストライク》を使って一気に葬ると、少女は呆然とした顔でこちらを見ると、手に持っている羽根を見て泣き出してしまった。
「それは？」
「ピナです。私の大事な…」
「君は…ビーストテイマーなのか。ごめん、君の友達助けられなかったな」
ビーストテイマー。ごく稀にだが、敵対モンスターがプレイヤーになつくことがある。
アインクラッドではそのモンスターを使役するプレイヤーのことをビーストテイマーと呼ぶ。
だが、使い魔なら…
「その羽根、アイテム名とか設定されてるか？」
少女が手元の羽根を右人差し指でタップすると、ウィンドウには《ピナの心》と表示された。
それを見て三度少女は泣きそうになってしまった。

「泣かないで、《心》アイテムがあれば蘇生できるかもしれない」
　その瞬間、彼女の顔はさっきと一転、キラキラと輝き始めた。
「ほ、ほんとですか!?」
「ああ、４７層にある《思い出の丘》というフィールドに《プネウマの花》という使い魔蘇生アイテムがある。実費だけもらえれば俺が取ってきてもいいけど、飼い主がいないとダメらしいんだよな。」
「４７層…いまはまだ遠いですけど、いつか…」
「使い魔を蘇生できるのは死んでから３日以内だ。」
　そして、今度はまた顔に絶望が浮かんだ。
　そこで俺は、アイテムストレージからトレードウィンドウを出して、次々と強力だがいらない武器と防具をトレードウィンドウに出して行く。
「それがあれば５〜６レベは底上げできる。ＭＤだから質は保証するよ。」
「…こんなんじゃ足りないかもですが…」
　そう言って彼女はほぼ全てのコルをトレードしようとした。
　だが俺はそれを止める。
「いいよ。俺がやりたくてやってるんだし、コルはいらない。」
「…どうしてそこまでしてくれるんですか?」

彼女の目には疑いの色が見える。まあ、当然だろう。
ここでは現実では犯罪になることをしても、多少ペナルティが付くだけなのだから。
理由は…そうだな。考えなくても浮かんでくる。
「俺も…何かを失ったときの気持ち、良く分かるからさ…」
「私、シリカって言います！」
「俺の名前は教えられないが…俺もこの後色々やることがあってな。主街地迄は送るけどそこからは別の人に任せる。安心してくれ。女の人だよ。」
そして俺はアルゴにメッセージを飛ばす。
《迷いの森でビーストテイマーのシリカという少女に出会った。
使い魔が死んで、思い出の丘に行きたいらしい。
俺は目立つわけにもいかないし、まずやることがあるからお前に頼みたい。
それにフローリアにはあいつのホームもある。お前が無理ならあいつに頼んでくれ。
俺の名前は絶対に出すなよ》
すると、1分程して返信が来た。
《了解ダ。全く、キー坊は人使いが荒いナ～
と言っても、ここ数日は忙しいから、あの娘に頼むとするヨ。》

＊

＊
＊

「ここまでありがとうございました！」
「いや、礼を言われるようなことはしてないよ。じゃあ。」
俺はそう言って、転移門広場へと向かった。
―第５５層　血盟騎士団本部―
俺は記憶を取り戻した当時から疑問になっていたことを茅場に問うためにＫｏＢの本部に来ていた。
本当ならもっと早くに聞きに来るべきだったのだが、少し様子を見ることにしたのだ。
「茅場」
「何かね。」
「…ＭＨＣＰはどうした？」
《Ｍｅｎｔａｌ（メンタル）　Ｈｅａｌｔｈ（ヘルス・）　Ｃｏｕｎｓｅｌｌｉｎｇ（カウンセリング）　Ｐｒｏｇｒａｍ（プログラム）》、通称《ＭＨＣＰ》。
これは俺が依頼を終えた後、暇潰し――もとい、ＳＡＯには精神疾患や、病気、怪我などを抱えた人なども来ると思い、心を癒すために作った物だ。

試作1号だけ完成しており、βテストの後2号、3号を作ろうとしたが、あのザマだ。
「……ＭＨＣＰは初日のみ外部接触禁止命令を出していた。ということはカーディナルが何か…」
「カーディナルが…」
「……君にサブＧＭの権限を与える。君は一応――――――なのだから、簡単に死なれても困るしな。その権限でコンソールを使って、ユイ君を救いたまえ。」
「恩に着るよ。」
俺は団長室を飛び出し、最前線の５６層へ向かった。

＊

＊

＊

「頼む！誰か！」
俺が唯一場所を覚えているコンソールに向かおうと５９層に来ると、転移門広場で誰かが叫んでいる。
話を聞くと、彼は《シルバー・フラグス》というギルドのリーダーで、とあるオレンジギルドに彼以外のメンバーを皆殺しにされたらしい。
そのオレンジギルドの名前は《タイタンズ・ハンド》。リーダーの名前は《ロザリア》

で、こいつだけグリーンカーソルだという。
「これ、俺が全財産叩いて買った回廊結晶だ。出口は黒鉄牢に設定してある。」
「分かった。それで、そのロザリアってやつの特徴は？」
「赤髪で、武器は槍、それで、ちょっと露出の高い格好をしてる」
赤髪で武器は槍で露出の高い格好…確か昨日シリカの近くに…
「シリカたちが危ない！」
俺は転移門に駆け出し、４７層に転移した。
＊
＊
＊
ユウキたちは既に出発したようで、フローリアにはいなかった。
ということで、俺は全速力で思い出の丘へ向かう。
しかし途中、橋が見えてきたところで索敵に反応があった。これはプレイヤーだ。
「そこにいるやつ、出てこいよ。」
「あらぁ？私の隠蔽を見破るなんていい索敵スキルしてるじゃない？」
「…あんた、数日前にシルバーフラグスってギルドを襲ったな。リーダー以外の全員が死んだ」

「あぁ、あの貧乏な連中のことね」
「彼はあんたを《殺してくれ》じゃなく、《牢獄に入れてくれ》と言った。あんたに彼の気持ちがわかるか？」
「分かるわけ無いじゃない。なにマジになっちゃってんの？バッカみたい。この世界ではないで死んだからって本当に死ぬ証拠もないし。あんた達、殺っちゃいな」
　ロザリアが合図をすると、周りから隠蔽スキルを解いて十人ほどオレンジプレイヤーが出てくる。
　そして、彼らは問答無用で襲いかかってきた。
　その時だった。左目につけていた眼帯の耐久値が切れてしまい、紅く染まってしまった忌々しい左目が顕となった。
　それを見た、オレンジの数人の動きが止まった。
「く、黒ずくめの装備に盾無しの片手剣、それに黒と赤のオッドアイ…まさか、《黒の魔剣士》？」
「ろ、ロザリアさん、ヤバいよ、こいつ、攻略組のトッププレイヤーだ…」
「なにいってんだい！こんなところに攻略組がいるわけないでしょ!?とっとと始末しちゃいな！」
「無理だ…大人しく牢獄に入ろう」

「そうだな。」

「コリドー・オープン」

彼らは素直に門に入っていったが、ロザリアだけは頑なに拒否していた。

だが、剣を突きつけ脅すと、腰を抜かしたので、門に投げ入れた。

そして、門を閉め、剣を背中の鞘にしまってため息をつくと、索敵に2つ反応があった。

これはプレイヤーだ。それも恐らく…

首を左に捻り後ろを見ると、見慣れた黒い長髪の少女が目を見開いて体をぷるぷると震わせ、茶髪をツインテールにした少女は驚いたような顔をしていた。

「かず――――」

「ごめんな。」

黒髪の少女――ユウキが俺の名前を呼んで近づいて来ようとした瞬間、俺は彼女に聞こえるかどうかくらいの声で呟き、左手を振った。

そして、転移コマンドを選択し、逃げるように転移した。

～感情とプログラム～

―２０２４年２月２４日　１２：５６　第５６層フィールド―

「――また、逃げちまったな」

俺は先程の行いを悔いていた。

この１年、謝り、本当のことを話すチャンスはいくらでもあった。

それに、嫌われ、恨まれるかなんて話してみなければわからない。

理性ではそれは分かっているのだが、本能がそれを認めようとしない。

それに俺はサブＧＭの権限まで持っている。ログアウトができないことを始め、幾らかＧＭよりも機能は劣っているが、それでもＧＭと同じことが出来るのは確かだ。

コンソールが操作でき、自分を破壊不能オブジェクトにしたり、周りの人を麻痺させたり等だ。

そんな事を考えていると、目的の場所に着いた。

「あった…」

木々の間に隠れるように存在する黒い石板。これがシステムアクセス用のコンソールだ。

これでＭＨＣＰ…ユイを呼び出せる。１年以上も出てこられなかったから何かしらバグなどがあるかもしれないが…

俺はコンソールに触れ、キーボードを出現させ、コマンドを打ち込んでいく。

カーディナルのユイの監視命令を解除し、ユイの干渉禁止命令も解除した。

そして最後に「ＭＨＣＰ　ＣＡＬＬ」というコマンドを入力し、ＥＮＴＥＲキーを押した。

その瞬間、コンソールの上が青く発光した。これはこの世界に来て一番最初に、そしてつい先程にも見たものだ。

ログインや転移をしたときの青い光が、人の形を象って行く。

そして、光が収まったとき、そこには黒いロングヘアーで白いワンピースを着た１０歳くらいの女の子が立っていた。

「ここは……」

「第５６層のフィールドにあるコンソールだよ、ユイ。」

「あなたは……？」

「桐ヶ谷和人だ。こっちの世界では”ゼロ”それと、”キリト”だ。」

「じゃあ、あなたが私の…パパなんですね…！」

「……

パパァ!?」

何故だ。俺はユイを呼び出して名前を名乗っただけなのに…ハッ！まさか！

「おいまさかそれ…茅場の入れ知恵…か？」

「？……違いますよ？お姉ちゃ…カーディナルさんが教えてくれました」

ユイは一瞬「何を言ってるのかわからない」みたいな顔をしてから、真実を言った。

だが俺はカーディナルにそんな機能があったという記憶はない。どういうことだ？

てか、お姉ちゃんて。

「カーディナルさんは確かに最初はこの世界を監視して調整するだけの存在でしたが…

私を外に出すときに溜まったバグを取り除いてくれたんです。その後、『これは良いものじゃな。』と言って何故かバグの一部をコピーして私に渡したんです。」

「うん…？と言うことはバグに何かしら言語化エンジンや感情模倣プログラムをアップデートするようなモノが入ってたのか…」

「そうなりますね。」

つまり、バグによって、カーディナルとユイが超高性能ＡＩになったと。カーディナルの奴、その時に俺がユイを作ったってばらしたんだな。

「まあ、これで俺の目的は達成だ。帰るか、ユイ」

「帰る…って何処にですか？」
「家に決まってるだろ？お前は俺の娘なんだから、一緒に住むのが当たり前じゃないか？」
「……はい！」
一瞬呆然としたユイだったが、すぐに明るい笑顔を浮かべた。
なんだこの可愛い生き物。
それはそうと、ユイの存在があるだけで今後の生活がかなり変わるかもしれない。
特にユウキたちのことは。
―第５５層　血盟騎士団本部―
俺はユイを一度５０層にあるホームに留守番させて、血盟騎士団本部に来ていた。このあとととてつもなく恥ずかしい口上が待っているのだが…
「無事に取り戻せたようだな」
「血盟騎士団、影の副団長キリト。ただいま任務から帰還しました……これ毎回やるのか？」
「まあそう言うな。雰囲気は大事だ。」
「言ってるこっちは恥ずかしいんだぞ！」
「ふっ、じき慣れるさ」

――なんだよぅ、他人事みたいに…
茅場は元々こんな性格なのか？Ｓなの？それとも中二心を忘れてないだけなのか？
あぁっ…俺の茅場のイメージがどんどん壊れていく…
そんな誰に向けるわけでもない考えを脳内で巡らせていると、ドアがコンコン、と２回の軽い音を鳴らした。
「入りたまえ」
「「失礼しま…ゼロ君（さん）!?」」
振り返ると、そこには血盟騎士団副団長であるアスナとランがいた。
「……俺は邪魔みたいだし、帰るとするよ。またな、ヒースクリフ」
「……息災で」
俺は団長室を出て、ゆっくり歩きながら本部出口に向かった。
本部から出て少ししたところで、後ろから誰かが走って追い付いてきた。
「待ってください、和人さん」
俺が足を止めて首だけ振り返ると、そこにはユウキの姉であるランが立っていた。
言われることなんて分かってる。ランの大切な妹を一人にしたんだから。
「藍子…」
「なぜ、木綿季を一人にしたの？」

「俺にはもう、あいつの隣にいる資格が無いからだ。勿論、お前らにも。」
「…。」
「そうだ、最後に1つ。もしユウキかランのどちらかに『剣姫』のユニークスキルが出ているなら、後でヒースクリフを通して俺に連絡してくれ。じゃあな」
「え…？」
俺はランにそう告げると、その場から立ち去った。
『剣姫』スキルの名が出たときの彼女の顔が面白かったのは、墓場まで持っていく秘密にしよう。
―５０層　アルゲード　宿屋―
「ただいま」
「お帰りなさい！パパ！」
「……うぉぅ…」
なんだこれ可愛い……娘にデレデレの世のお父様方の気持ちが分かった気がする。
「どうしたんですか？」
「いや、ユイを見てると癒されるなぁ、って思って」
「それはＭＨＣＰ冥利に尽きますね！」
「…そうだな」

頭を撫でてやると、ユイは「むふー」と鼻息を立てて満面の笑顔になっていた。
これだけで今まで悩んでいたことが全て馬鹿らしくなってくる。
まるで犬や猫のような…はっ！もし猫耳アイテムがあるなら、それをユイに装備させて…絶対可愛い。あ、同じ装備をしたユウキを隣……に……
「……ははっ。なんでこういう時真っ先にあいつの顔が浮かんでくるんだろうな」
「パパ？」
――ピロリン♪
何処からか、そんな音が鳴った。音の主はメッセージウィンドウだった。送り主は…ヒースクリフ。
内容は、
『ユウキ君とラン君、二人ともに《剣姫》スキルが出現しているようだ。同じユニークスキルが二人同時に出るとは驚きだが…。どうかね、仲直りがてら一戦交えては。どうせ《二刀流》スキルを習得しているんだろう？』
と言うものだった。二人同時とかもうユニークスキルってなんぞ？って話になるなぁ…。
取り敢えずスキルの説明だ。《二刀流》は男性プレイヤーで最高の反応速度を持つ者に与えられるユニークスキル。

そして《剣姫》は女性のプレイヤーで最高の反応速度を持つ者、そして《二刀流》使いと……あああぁ!!!これ以上言いたくねぇ！

というか、自分でも気付かないうちにユウキはともかくランにもそんな感情を…。どうすればいいんだろう…

俺と、ユウキと、ランはメディキュボイドを使っているから、このユニークスキルを取れる確率は非常に高かった。

『お前それ二人と――しろって事じゃねえかよ！とり合えず、ＫｏＢ本部の応接間に明日午前１０時にランとユウキを集めてくれ。勿論、他の中に誰も入れないでくれ』

『了解した。そのように伝えておく。』

と、明日の１０時から予定ができた。

ユイはどうしようか。長い時間一人で居させるのもちょっと可哀想だし…

「ユイ、明日の朝１０時頃に俺は血盟騎士団ってギルドの本部に行く。ユウキとランって人に会うんだけど、一緒に来るか？」

「……はい！実はモニタリングしてるときからそのお二人のことが少し気になってたんです。それに、もしかしたらどちらかが私のママになるかもしれませんしね！」

「ママって…さ、さ、流石にないだろ。現実でもずっとぼっち（ソロプレイヤー）だった俺が…あ、は、は、」

「？でも、お二人に《剣姫》ｓｋ」

「それ以上言わないでくれよ…」
「???は、はい」
なんだろう。ユイの頭の上に幾つかクエスチョンマークが見える気がする。
純真無垢ってのも怖いときがあるんだな。
「ま、取り敢えず今日は寝よう。お休み」
「おやすみなさいです、パパ」

～重い告白～

―２０２４年２月２５日　第５５層　血盟騎士団本部―

「先ずはいきなり呼び出してすまない。今日は二人に話したいことがあってきたんだ。」

「「……。」」

「ユウキ、あの時独りにして悪かった。俺はもう覚悟は出来てる。この話を聞いた後、拒絶してくれても構わない。」

俺は覚悟を決めた。この話をして拒絶され、糾弾される覚悟を。

「単刀直入に言うと、このソードアート・オンラインに置けるカーディナルシステムの一部のプログラミングとソードスキル、エネミー、各種スキル、マップの一部……そして、今二人が使っているメディキュボイド試作１号機と３号機の基礎設計をしたのは俺だ。」

「「え…？」」

俺は自分の正体を話した。同じメディキュボイドに入っている仲間が、そしてＳＡＯで一緒に戦っている仲間が開発者の一人だと言う現実を、自分自身と目の前にいる二人

の少女に突きつけた。
俺はここで殺されたって構わない。その時は剣を受けよう。
だが、自分がサブＧＭであることは言えなかった。そんなことをしたらＧＭ…つまり茅場の居場所を聞かれ、攻略組はこんなレベルで無謀にも挑み無惨に殺されるだろう。
「…本当は目が覚めた時点で全部思い出してた。
だけど、この事を言ったらどうなるか…。
ユウキの事を信じてなかった訳じゃない。ただ、怖かったんだ。
たった半年とは言え、ずっと隣で戦ってくれたユウキに恨まれ、糾弾され、拒絶されるのが。」
――こんなのはただの言い訳、綺麗事、戯言だ。ただ同情を買うような言葉を並べているだけ。
この時点で死んだ者は３１２９人。間接的にとは言え、俺は３０００人余りの人間を殺した殺人鬼だ。
だからこんな言葉を放つ資格も、目の前にいる二人に会う資格も、本当はない。
――そう、思っていた。
「和人、ボクは今怒ってる」

「……そうだろうな」
「君が素直にその事を話してくれなかった事に。」
「え…？」
　それは俺にとって、驚愕と同時に困惑するには十分な言葉だった。
「ボクは和人には感謝こそすれ、恨むことなんてしない。和人はＳＡＯがデスゲームだなんて知らなかったんでしょ？だったら君も一人の被害者じゃないか」
「そうね、私も同じ気持ち。和人さんがいなければ私たちは既に死んでいたかも知れませんし。」
　――俺は、君達をこの世界に閉じ込める原因となった人間なのに…感謝？
　俺の脳内はそんな思考で一杯だった。だが、それも次の二人の言葉で打ち消されることになる。
「ボク、和人がメディキュボイドのデザインをしてることは知ってたよ。あのあと倉橋先生から聞いた言葉を思い出したんだ。先生は
『メディキュボイドを設計した人間がこんな風に記憶を無くしてしまうなんて残念です』って言ってたから。」
「先生はメディキュボイドを使えばＡＩＤＳが治る可能性があると言っていました。だから私たちは和人さんに感謝してるんですよ。」

二人は輝かしい笑顔を浮かべて俺に感謝の意を伝える。
そんな二人を見て、俺の目に熱いものがこみ上げてきた。
「ごめん…ほんとに…ごめん…な」
俺がそう言うと今まで黙っていた愛娘が話し出した。
「大丈夫ですよ、パパ」
「ユイ…」
「パパがあのときＶＲの可能性について考えなければ私は生まれて無かったんです。私も私を生み出してくれたパパに感謝してるんですよ？」
「ッ……もし現実に帰れたらお前に数十万…いや、数百万規模の妹が出来るかもしれないから覚悟しとけよ？」
「ええ…流石にそれは困っちゃいます…」
「え、ええっと…和人が生み出したって…ユイちゃん？はＡＩなの？」
木綿季がユイについての疑問を口にした。そうだ、そういえば紹介してなくてユイは空気になってたんだ…
「はい！私はＭＨＣＰ―００１　コードネーム・Ｙｕｉです！プレイヤーの皆さんの精神的な問題を解決するために生まれました！」
「精神的な…？じゃあ和人さんはＳＡＯがデスゲームになることを知って…」

「いや知らない知らない！あの時は病気や怪我の人もＶＲＭＭＯには入ってくるからそういう人の精神的なケアを…と思って。デスゲームにならなきゃあと数人作る予定だった。」

「……確かにこれは見るだけでも精神的なケアになるね。ユイちゃんすっごい可愛いから」

本当にその通りだ。プログラミングをしたのは俺でもデザインをしたのは茅場本人。あいつ…良く考えてやがる。

「ありがとうございます！でも私よりユウキさんたちの方が可愛いと思いますよ？」

「ありがと！」

うん、なんかすごく、和む。最初の張り詰めた空気がユイのお陰でこんなにほんわかした空気になったよ。我が娘ながらＭＨＣＰってすげえなぁ…

等と感慨に浸っているとランが問いをかけてくる。

「ところで…《剣姫》スキルがどうとか言ってましたけど、それって…」

――忘れてた。でも、なぁ…話しにくいよなぁ…

「ああ、その事、なんだがな…」

「なんだよーもったいぶってー」

「《剣姫》スキルを使用するには条件があって……」

「確かに使おうとしたら『条件を満たせば使用可能となります』って表示が出たね」
「その条件っていうのが……《二刀流》スキルを持つ者との、結婚……なんです」
「えっ？」
「んでもって、《二刀流》のスキルを持っているのは俺、なんです。」
「えええええええええっ!?」
「……茅場に聞いた話だと、《二刀流》は男性プレイヤー中、最速の反応速度を持つ者に出現し、
《剣姫》スキルは……女性プレイヤー中、最速の反応速度を持って《二刀流》の人と、その、えっと……りょ……」
「りょ？」
「《両想い》の場合出現する……とだけ。」
正面を向くとユウキとランの顔は真っ赤になっていた。多分、俺もだけど……
その隣でユイは終始ニコニコしていた。今はユイの心が読める。『私にママが出来るんですね！』みたいなことを思っているのだろう…
「え、えええええええええええええええええええええええええええええええええっっ!?」
その日2度目の叫び声が血盟騎士団本部に木霊した。

～甘い告白～

《ソードアート・オンライン》、通称《ＳＡＯ》。２０２２年１１月７日、ＳＡＯの開発者、茅場晶彦が自身の開発したナーヴギアの特性を利用してＳＡＯをデスゲームにしたことで世界中を震撼させた。

外の人間たちはこのＳＡＯの中にいるプレイヤー達は絶望の淵に立たされている等と思っているだろうが、実際はそうではない。

最初こそ絶望し自殺する人間も数多くいたし、攻略となれば死人が出ることもある。だが辛いことばかりじゃない。この世界には娯楽もあるし、楽しく過ごせるシステムがある。

その一つが《結婚》システム。これは文字通り異性プレイヤーと結婚できるシステムだ。

だがやはりここは”日本”ではなく”アインクラッド”なのだ。日本の結婚とは違い、一夫多妻、もしくは一妻多夫もありなのだ。（但し、３人まで）

この結婚によって何が起こるかと言うと大きく分けて２つある。

まず《ストレージ共通化》。

パートナーとのストレージを共通化する事によってアイテムを共有することができるほか、パートナーのステータスを確認することができるようになる。
次に《ハラスメントコードの無効化》。
結婚をすると、パートナー同士だとハラスメントコードが発動しなくなる。
なので一時期、結婚システムを利用した性犯罪も多発したのも確かだ。
……とは言ってもそういった行為をするにはメインメニューの奥底にある《倫理コード》を解除しなければならないのだが。
そして、その結婚システムを利用したユニークスキルまであるのだ。
《剣姫》というユニークスキル。
出現条件はＳＡＯ最速の反応速度を持つ女性、そして《二刀流》のユニークスキルを持つ者と両想いであること。
そして、使用には制限があり、その制限を解く条件が《二刀流》持ちとの結婚。
結婚システムだけではなく、感情読み取り機能まで最大限に活かしたスキルである。
スキル効果としては、専用ソードスキルはないが、ＡＧＩ＋３０　ＳＴＲ＋１５
ソードスキル後の硬直時間が通常の１／２になる等、かなりのチート性能だ。
――――と、ここまで長々と解説してきたユニークスキルだが。
そのスキルを同時に取得したイレギュラーな姉妹が目の前にいる。

《二刀流》を取得しているのは俺。それはつまるところ、俺の本能は目の前の双子姉妹
――木綿季と藍子に二股をしようとしているということで…
「えっ、えと、ええ!?」
「そっ、そそそ、それってつまり、ええっ!?」
「ええっと…そういう、ことだ。日本人としては自分でも少し抵抗あるけど……」
ユウキとランの顔は真っ赤になっていた。恐らく俺の顔もだが――
「22層の湖の畔のフィールドに、空いているログハウスがあるんだ。四人でそこに引っ越そう。それで……」
一度切って、深呼吸をしてから口を開く。
「俺と結婚しよう」
『はい!』
二人は満面の笑みを浮かべて承諾してくれた。
隣でユイは「ふふっ。ママが二人もできましたね♪」と笑顔で呟き、俺達は自分でも分かるくらいに真っ赤になってしまった。
俺達はヒースクリフに報告をして、22層へ向かった。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
―22層　ログハウス―

「そう言えばユイ、ユウキたちのことどう呼ぶんだ？」
「どう、とは？」
「だってさ、母親が二人もいるんだぜ？分けて呼ばないと分かりにくくないか？」
「それもそうですね…じゃあ、ランね――」
「待て。それはダメだ。まず母親であって姉ではないし、それ以前に色々とまずい。」
「うーん…じゃあラン母さんとユウ母さん！」
「いいね！」
「そうね～」
　２つの高い声が後ろからして振り向くと、ユウキとランがいた。
「い、いつからいたんだ？」
「ん？ユイちゃんがなにか言おうとした辺りから？」
「そっ、そうか」
　あっ、これ後でイジられるやつか？……まあいいや。
「運び込みとか全部終わったのか？」
「うん！終わったよ！後はレイアウトをするだけだから手伝って！」
「了解」
「私はどうすればいいですか？」

「んー。ユイちゃんには小物を運んで貰おうかな。」
「分かりました！」
こうして、俺達の新婚生活（？）は幕を開けた。
――そう言えば、現実に帰ったらどうすればいいんだろう…。
そんなことを考えてしまう俺であった。

～対立～

―3月6日　第56層　パニ―

「村の中にフィールドボスを誘い込みます。」

その言葉に会場が騒然とした。堪らず俺は大声で言い返してしまう。

「待てッ！そんなことをしたら村の人たちが…」

「それが狙いです。ボスがＮＰＣを”殺している”間にボスを攻撃、殲滅します。」

――殺す？ＮＰＣを？　激昂したくなる気持ちを必死に抑えて、声を絞り出す。

「――ＮＰＣは岩や木のようなオブジェクトとは違う！だって彼等は……」

「生きている…とでも？あれは単なるオブジェクトです。例え殺されようとまた再湧出（リポップ）するのだから。」

「……そうか。それならば、俺はこの作戦から抜けさせてもらう。君のその考えには従えない。」

「うーん。いくらアスナでもボクもちょっとその考えには同意できないなー。」

ユウキも俺の意見に同意した。恐らく俺に気を遣ってくれたのだろう。

「な…ッ！」

そして、俺は逆隣にいたランに耳打ちする。
「ランはどうする？残るか、俺達と一緒に行くか」
「私は残ります。一応私もＫｏＢの副団長ですしね。どうせ、二人でボス討伐に行くとか言うんでしょう？」
「君には全部お見通しか。じゃあ俺達は先に帰るよ」
「後でね、姉ちゃん」

―翌日　第５６層　フィールド―
「確かこの辺りだよな」
「うん、そのはず」
「取り敢えずボスの確認をしておこう。ボスの名前は《Ｌａｒｇｅ　Ｂｏａｒ》。１層で出てきた《Ｆｌａｎｚｙ　Ｂｏａｒ》の強化版だな。基本的な戦い方はフレンジー・ボアと同じだ」
「りょーかい！……ん」
「おっ…来たな」
――ブモオオオオオオオオッ!!!
ＨＰゲージは４本ある。つまりそれはボスモンスター級ということ。

――まあ、実際ボスモンスターなのだが。

「行くぞ。ユウキ！」

俺はメニューを操作し、ストレージから、《クイーンズ・ナイトソード》を取り出し左手に装備する。

「うん！」

ユウキは《ソニック・リープ》を発動し、一気に間合いを詰めた。

そして、スピードの乗った重い一撃で1本目のバーを1割ほど削った。

そしてすぐさま、次のソードスキルの体制に入る。

元々硬直の少ないソニック・リープだ。《剣姫》スキルの影響で硬直は殆ど無いと言っていい。

次にユウキが放ったのは8連撃、《ハウリング・オクターブ》。それだけでボスのゲージの1本目が全損し、そして2本目も少し削った。

――意外と紙装甲……なら攻撃が強いのか…？

「スイッチ!!」

「うおおおおっ!!」

《二刀流》専用ソードスキル、《ダブル・サーキュラー》。

これがまたかなり使える。硬直が少ない割に、2連撃でそこそこの威力がある。

そして、硬直が解けた瞬間次の技。
《二刀流》専用ソードスキル、《スターバースト・ギャラクシー》
１６連撃だが一撃一撃の与ダメージ数は少ない。その代わり、最後の数撃で後ろを取れるのが良いところだ。問題は――――
「はあああああっ!!!」
――――左手に握った剣が耐えきれるかどうか。
一撃、また一撃、確実にボスに当てていく。
縦に、横に、斜めに切り裂いて、ボスからの出血エフェクトは止まらない。
正面からの最後の攻撃。ボスの脇を突きで掠めて背後へ回った時、
――パキッ
左手の剣が折れた。
技を中断してしまったため、俺には長い硬直が課せられた。その隙をボスは見逃さず、俺に思い切り突進してきた。
――ブモオオオオオオオッ!!!
牙で攻撃された俺のＨＰはもう少しでレッドゾーンというところまで陥った。
「ゼロッ!!」
ユウキが叫んで《デッドリー・シンズ》を放つと、ボスのＨＰは消し飛び、ポリゴン

の欠片となった。
「悪いな。助かった」
「んーん、大丈夫。それよりもう1本の剣は二刀流の上位スキルに耐えられなかったね…」
「そうだな。そろそろエリュシデータと同等の剣が欲しいところだな…」
「あっ…アスナたちが来たよ」
アスナたちフィールドボス討伐隊が、俺達の所へやって来て、驚愕の表情を見せている。
「ま、まさかあなたたち二人で…？」
アスナの間の抜けた表情に俺達は顔を見合わせ、にっこりと笑って、
「「ぶいっ!!」」
ピースサインを送ってやった。

―第２２層　ログハウス―

「「ただいまー！」」
「お帰りなさいです！パパ！ママ！」
ユイが笑顔で俺たちを出迎えてくれた。俺は可愛さに負けて抱き締めて頬擦りをし

てしまう。
「う～ん。ユイは可愛いなぁ～」
「ふふふっ。くすぐったいですよ～パパ」
「ずるい！和人ばっかりユイちゃんを独り占めして！」
「私達にもユイちゃん成分を分けてください！」
「わっ、わぁぁぁ」
３人の人に抱きつかれてユイが困ったように悲鳴をあげた。
――この日々がずっと続いたら良いのに。
このＳＡＯという檻に囚われているのに、そんなことを思ってしまった。でも、いつか俺達の現実の体にも限界が訪れる。それを分かっていながらそれを思ってしまったのだ。
――これが、日常になってしまってるんだな。
自分達がある意味、最悪と言える精神状態となっていることを実感した。
……まあ、それは今はいいのだ。それより――
「……なあ、最近アスナ怖くないか？」
「……確かに。」
「そうですねぇ…。私は和人さんとユイちゃんがいるからある程度発散できますけど、

彼女は立場もそうですし色々ストレスとかが溜まってるんでしょう」
――やはり精神的に参ってきているプレイヤーも多くいるようだ。
これじゃあＭＨＣＰを作った意味がないじゃないか。
などと考えているとユウキが突然話題を変えた。
「そういえばさ和人、ＫｏＢの副団長ってどういうこと？」
「……なぜそれを」
「クリスマスの時にメンバー表を覗いたら見つけたんです。」
「そうか…。あれはヒースクリフが俺の事情を聞いて……『ふむ。ギルドの影で暗躍する副団長……。これは良いな。和人くん、これからはＫｏＢ団長直属、”影の副団長”となりたまえ。私からの任務を終えて戻ってきたときには”影の副団長、ただいま帰還しました”と言うのだぞ。』って……。あいつ良い歳して厨二病抜けきってないんだよなぁ…。」
「「……。」」
「ふふっ。ヒースクリフさんって、面白い人なんですね！」
ユウキとランは唖然とし、ユイは楽しそうに笑っている。
「というか三人目の副団長って、どうなんだろう…。普通副団長つったら二人までじゃねえのかよ」

「か、茅場さんのこだわり？じゃないかな？」
「……そうだろうな」
「はい。暗くなる話はここまでにして、ご飯にしましょうか」
茅場に少しばかり呆れたが、それでもデスゲームを作ったということ以外は尊敬している。
しかし、９５層を過ぎると俺はＧＭになってしまう。
９４層までにＧＭである茅場を倒すことができればゲームをクリアすることができるが、９５層以降は俺を倒さないとゲームをクリアすることができない。
つまり９４層までに倒すとなると、師でもある茅場を一方的に殺さなくてはならない。
しかし、それを避けて１００層で茅場と一緒に死ぬとなるとそれは木綿季たちに殺されなくてはならないということで――。
明るい雰囲気のログハウスの中、俺一人だけが、神妙な顔つきを変えることができなかった。

～圏内事件～

―第５９層主街区　ダナク　とある木の下―

「何やってるの？」

俺たち四人が気持ち良く昼寝をしているというのに、何処かから邪魔をする声が入ってきた。

今日はアインクラッド最高の気象設定だ。暑くもなく寒くもなく丁度良い気温に、柔らかな日差し、そしてそよ風。

これほど外で昼寝をするに最適な気象設定があるだろうか！

だというのに――

「ああ、アスナか」

「迷宮区で皆が必死に攻略に励んでいるのに、なんで貴方はこんなところで昼寝なんかしてるのよ」

「今日はアインクラッドで最高の季節、最高の気象設定だ」

「はぁ？」

「ほら、こんなに日差しも風も気持ちいい。それに、ユウキもランもユイもぐっすり寝て

るぜ」

自分の右隣を見るとぐっすり眠っているユウキとラン、そして二人に抱きつかれて眠っている愛娘、ユイの姿がある。

「そうかしら。天気なんていつも…え？ランさんまで……。」

「ほら、君も横になってみれば分かるよ。」

そう言って俺はもう一度目を閉じた。

――数時間して。

「ふぁぁぁ…ん？」

目を覚まし、あくびをした後、左側に赤と白の何かが見えた。そちらに顔を向けるとそこには眠っているアスナが。

「本当に寝ちまうとはなぁ…」

悪態を吐きながらストレージから飲み物を取り出して近くにあった塀の上に座り、ユウキたちを見張る。

最近は睡眠ＰＫなんて物騒な事件が起きているから気を付けなければならない。

よって先程は熟睡することができなかったのだ。

暫くして日も傾き、寒くなってきたので四人にコートでもかけてやろうかと思ったとき、

「くしゅんっ」
と控えめなくしゃみが聞こえた。
見るとアスナが「うぅ～ん」と身動ぎしてから起き上がったと思えば、
「うにゅ……ん？……へ？……ほへ？」
と謎言語を発した。
「おはよう。良く眠れた？」
すると、彼女の顔は羞恥からか赤く染まり、次に困惑からか青くなり、そして怒りからかまた赤く染まった。全く、見ていて飽きない。
「……なっ！……あん……どう!?」
「なんで、あんた、どうして」と言おうとしたのだろうか。
困惑からかしっかり言葉を発せていない。
すると、彼女は腰の細剣に手をかけた。
「ひっ!?」
ダメージはないと分かってはいるが反射的にブロック塀の後ろに飛び退いてしまう。
すると彼女は震える手で抜きかけた細剣を鞘に納め、
「……ご飯一回」
「え？」

「ご飯！なんでもいくらでも一回奢る！それでチャラ！どう？」
なんと攻略組トップレベルの実力者である《閃光》サマが晩飯を奢ってくれるというのだ。
「おっ、おう。……おーい。ユウキ、ラン、ユイ、起きろー。アスナが晩飯奢ってくれるってよー」
「ホント!?」
真っ先に飛び起きたのはユウキだ。流石の食い意地である。
ランとユイはこちらも「「うにゅ…」」と謎言語を発してゆっくり起き上がった。
「……かじゅとしゃん、おはようごじゃいましゅ…。ふぁぁぁ」
寝惚けているのか、俺をリアルネームで呼んだ上、呂律が回っていない。
「ふぁぁぁ。パパ、おはようございます！」
ユイはすぐに目を覚ますことができた。流石、ＡＩと言ったところか。
「おはよう。良く眠れたか？」
「「はい！（うん！）」」
「じゃあ行こうか。」

―第５７層　マーテン―

「あれ、血盟騎士団のアスナ様とラン様じゃないか？」
「あと《絶剣》のユウキもいるぞ」
「じゃああの黒いのは《黒の魔剣士》か！」
「……あのちびっこは誰なんだ？」
　周りがとても騒がしい。俺達も有名になったもんだ。因みに俺の《黒の魔剣士》という二つ名は真っ黒な服装と黒と赤のオッドアイから来ているらしい。そしてアスナには《閃光》。恐らくスピードからだろう。
　そしてユウキには《絶剣》、ランには《舞姫》という二つ名がつけられている。
　ここまで有名になると逆に困るというものだ。
「ゼロ君」
「ん？」
「今日は、その、ありがとう」
「ああ、良いよ別に。ユウキたちも熟睡してたし、睡眠ＰＫなんてされたらたまったもんじゃないからな」
「そうだね。まあ、アスナ最近疲れてたみたいだし良い発散になったんじゃない？」
「そう――」
　――キャアアアアアアッ!!!

レストランの外から悲鳴が聞こえた。
俺達は迷う暇もなく席を立ち、悲鳴が聞こえた方へ駆けていった。
店から出ると、店の目の前にある建物の前にかなりの人だかりができていた。その人だかりの目線の先には――
首を吊られ、腹に短槍を刺された鎧のプレイヤーがいた。
そして槍が刺さった箇所からは出血を思わせるダメージエフェクトが出ていた。
「何してる！早く抜け！」
「ゼロ君とランさんは下で受け止めて！私はロープを切るから！」
「了解！」
「アスナ！ボクも行くよ！」
俺が叫ぶとそのプレイヤーはハッとしたように槍を抜こうとするが、槍の返しが引っ掛かって上手く抜けず、悪戦苦闘しているうちに――
そのプレイヤーはポリゴン片となった。
――ん？死亡エフェクトとは少し違うような……ああ、そういうことか。
「パパ、あのプレイ――」
「ああ、分かってる。でも今は言うな。事情が知りたい。」
「分かりました。」

ランとユイと俺で建物の中に入るとアスナとユウキが悔しそうにしていた。
「何か分かったか？」
「ダメ。手がかりも何も無かったよ」
「そう。なら聞き込み、ね」
＊
「誰か！この中にさっきの一件を最初から見てた人いませんか！」
ユウキが持ち前の大声で呼び掛けると一人の女性プレイヤーが周りを見て少し躊躇ってから出てきた。
「さっきの悲鳴は、君か？」
「はい。私はヨルコって言います。さっきの人と一緒にご飯食べに来てたんですけど、急にいなくなったと思ったら…」
「辛いこと思い出させてごめんなさい。取り敢えず場所、移動しましょうか」
その後、場所を移動し、詳しい話を聞いた。
ギルド《黄金林檎》のリーダーが殺されたこと。レアドロップの指輪のこと、それをどうするかで揉めたこと等、かなり詳しく話してくれた。
「幻の復讐者…か」
「ゼロ？」

「いや、なんでもない。取り敢えず俺はこの事件からは手を引かせてもらうよ。邪魔しちゃ悪いしな」

「！」

「「？」」

ヨルコさんは一瞬驚いたような顔をしていたが、微笑を返してくれた。

――取り敢えず、オレンジが関わっている事だけは、調べておかないと。

～幻の復讐者～

―第５０層　アルゲード―

『また頼むぜ、兄ちゃん。』

アインクラッド第５０層、アルゲードの一角にある雑貨屋。

その店の前まで行くと、項垂れた鎧を着たプレイヤーが退店し、店の中からはそんな声が聞こえてきた。

俺とユイはその店に入る。

「よう、エギル」

「こんにちは。エギルさん」

「おう。ゼロにユイちゃんか。」

「相変わらず、阿漕な商売してるようだな」

「安く仕入れて、安く提供するのがウチのモットーなんでね」

「後半は疑わしいものだけどな」

毎度お馴染みのやり取りをすると、エギルは疑問を感じたかのように顔を歪め、俺に問うた。

「お前がユウキやランと一緒にいないなんて珍しいじゃないか。一体どうしたんだ。」
「ちょっとな。んでさ、今日は鑑定してもらいたいものがあるんだが…」
俺達は店の2階、居室に移動すると、事のあらましを話した。
「圏内でＨＰが全損？」
「ああ。といっても、性格には防具の耐久値が無くなるのと同時に何処かに転移した、だろうけどな。で、俺達がこれ以上深入りする理由はないんだが、オレンジの関与の可能性も捨てきれないし…。と、そこでこれだ。」
俺はストレージから槍を出すと、エギルに手渡す。
「どれどれ。……これは、プレイヤーメイドだ。作成者は、《Ｇｒｉｍｌｏｃｋ》となっているな。少なくとも、一線級の刀匠じゃない」
「そうか。一応、固有名も聞いて良いか？」
「《Ｇｕｉｌｔｙ ｔｈｏｒｎｓ》、罪の茨ってとこか。」
「罪の茨…ですか。」
偶然もあったものだ。基本的にＳＡＯでのプレイヤーメイド武器の銘はランダムだ。だからこんなピッタリの名前になるのは天文学的確率になる筈なのだが…。
取り敢えずヨルコさんにメッセージを送ってみる。
《グリムロックという人は黄金林檎の元メンバーなのか？》

１分ほどして返事が返ってきた。
《はい。グリムロックさんはリーダーのグリセルダさんの旦那さんです。とても仲が良くてお似合いの夫婦でした》
――やはりレアアイテム狙いの睡眠ＰＫなのか？だがオレンジがどこでそれを知ったのか。……そう言えばグリセルダさんとグリムロックさんは結婚していたんだよな。ということは彼女が亡くなった時点でレアアイテムの指輪は……
「――なんでだよ」
思わずそう呟いてしまった。余りにも残酷すぎるこの事件の犯人に。
「エギル、ありがとう。今日は帰る。ユイ、行くぞ」
「はい」
「じゃあな。気を付けて帰れよ」
エギルの店から出ると、メッセージが届いた。ヨルコさんからだ。
《明日シュミットを呼び出して作戦を決行することとなりました。》
対して俺は、
《オレンジにだけは気を付けてくれ》
と返信し、２２層の我が家へと向かった。

―２２層　ログハウス―

「「ただいま～」」

「お邪魔しま～す」

「お帰りなさいです！」

「お帰り…ってアスナもいるのか」

俺とユイが帰ってきてから１５分ほどすると、ユウキとラン、そしてアスナが帰ってきた。

「なによ。私がいたらまずいことでもあるの？心配しないで。夜には帰るから」

「よっ、夜って！別に俺はユウキたちとはそんな…」

「あら？まだ手を出してなかったの？」

「うっ、うるさいなぁ…」

アスナが俺をからかうと、ユウキとランは顔を赤くし、ユイの頭上にはクエスチョンマークが見えた気がした。

「こ、こほん！そんなことより、ゼロとユイちゃんは何か分かったことがあるの？」

ユウキが話を変えた。ナイスだ。

「俺とユイはほとんど分かってる。」

３人は「そりゃそうか」という顔をした。そりゃ、訳もなく事件の解決から手を引く

わけがないし、そこまで白状な人間を演じてきたつもりもない。
「犯人はどんなトリックを使ってあの事件を起こしたんですか？」
「んー、じゃあヒントその1。耐久値とエフェクト」
「耐久値とエフェクト？うーん……あっ！まさか……カインズさんは死んでない？」
「「えっ？」」
　アスナがどうやら答えを導きだしたようだ。ユウキとランはまだ分かっていないようで、頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。
「圏内ではＨＰは減らないけど防具の耐久値は減る。だからあの槍が削っていたのはＨＰじゃなくて鎧の耐久値だったのよ。それで鎧がポリゴンの欠片となるのと同時に転移結晶で何処かに転移した…。《幻の復讐者》ってことね」
「正解です！アスナさん！」
　ユイは笑顔でその推理が正しいことを告げた。その顔を見たアスナは左手で顔の下半分を押さえ悶えている。やはりユイは可愛いのだ。
「ということはヨルコさんもグル？」
「そうだな。恐らくヨルコさんとカインズさんはグリセルダさん殺害にシュミットが関与していると睨んで圏内事件を起こしたんだろう。だからこれ以上踏み込む必要はない……って思ってたんだけど」

「けど？」
「結婚システムの事について思い出したんだ。双方の同意で離婚した場合はアイテムが自分５０、相手５０で自動分配されるんだけど、一方的に離婚しようと思ったらアイテムは自分０、相手１００の分配になる。でも１つだけ自分１００、相手０になる離婚方法がある」
「それは？」
「死別です。結婚相手が死ぬと、共通ストレージのアイテムは全て自分のものになり、ストレージに入りきらなかったアイテムは足下にオブジェクト化されます。」
「ということはまさか犯人は…」
「「グリムロック!?」」

～愛≠殺意～

―２０２４年４月１２日―

――ガシャガシャガシャ

と、とある宿屋の一室に音が響く。

音の元はディアベルたち率いるギルド・聖竜連合のタンクであるシュミットの貧乏ゆすり。

軽く恐怖を感じているのだろうか。

「本当なのか、ヨルコ。カインズが殺されたと言うのは。」

「ええ、本当よ。」

「ッ!!なんで今更カインズが殺されるんだ！あいつが指輪を奪ったのか！グリセルダを殺したのはあいつだったのか！グリムロックは指輪売却に反対した３人全員を殺す気なのか!?俺やお前も狙われているのか！」

「グリムロックさんに槍を作ってもらった他のメンバーの仕業かもしれないし、もしかしたらグリセルダさん自身の復讐なのかもしれない」

「え？」

「だって圏内で殺人をするだなんて、幽霊でもない限り不可能だわ」
「なっ…」
シュミットはその言葉に反応して口をパクパクと開閉させている。
「私…昨夜、寝ないで考えた。結局のところ！グリセルダさんを殺したのはメンバー全員でもあるのよ!!指輪がドロップした時、投票なんかしないで、グリセルダさんの指示に従えば良かったんだわ!!!」
ヨルコさんが立ち上がり狂ったように叫ぶ。だがこれもシュミットを引っ掛けるための罠。凄まじい演技力だ。
「ただ1人、グリムロックさんだけは、グリセルダさんに任せると言った。だからあの人には私たち全員に復讐する権利があるんだわ…」
「お前はそれでいいのかヨルコ！こんな訳の分からない方法で殺されて！それでいいのか!?」
シュミットが叫び、ヨルコさんがそれに反応しようとした瞬間、
――ドシュッ
と、刃物が何かに突き刺さるような音。
それと同時にヨルコさんは後ろを向き……その背中には短剣が刺さっていた。
そしてヨルコさんはそのまま窓から下に落ちていった。

「ヨルコさん！」
叫び、窓に駆け寄って下を覗くとポリゴンが散るのが見えた。
転移したのを確認すると部屋に向き直る。
すると椅子でシュミットが震えていた。
「あのローブはグリセルダのものだ。あれはグリセルダの幽霊だ。俺たち全員に復讐に来たんだ！幽霊なら圏内でＰＫするなんて楽勝だよな…あはははは」
「……。」
―数時間後―
「そろそろ、シュミットさんが１９層に行った頃かしら？」
「そうだな。俺達も向かうか。一応対毒ＰＯＴと回復結晶は持って行ってくれ」
「「了解！」」
―第１９層　十字の丘―
俺はユウキと馬に乗ってヨルコさん達がいる場所へ向かっていた。
そこはヨルコさんによるとグリセルダさんの墓だそうだ。
「あれはっ!?」
到着する寸前、３人の人影が見えた。関係者の誰でもない、あれは…
「ＰｏＨ…!!」

奴らも俺達がこちらに向かっているのに気が付いたのかこちらに注意を向けた。
――まさかあいつが来るなんて…ッ!!
目の前まで来て、馬を止めようとするが、操作を誤って頭を上げさせてしまった。
「おわぁ!」
「うわわわわっと!」
俺は盛大に馬から振り落とされ、ユウキは綺麗に着地した。
「よく今ので着地できたな…。」
「ふふん。まあ、間に合ったみたいだね。」
「そうだな。どうする?この後来る攻略組３０人と一戦交えるか?」
「チッ。お前ら、行くぞ。」
ＰｏＨたちは剣をしまい、どこかへ行ってしまった。
「また会えて嬉しいよ、ヨルコさん。そして初めましてかな?カインズさん。」
「いや、あの時一瞬目が合いました。この人には見破られるかなって予感はしてたんですよ」
「ゼロ。助けてくれたことには感謝しているが、なぜ奴らがここに来ることが分かったんだ?」
「そんな気がしたんだ。元々予感はしてたんだ。この事件の裏にはレッドが関わってる

んじゃないかって。何故ならこの指輪事件の裏で手を引いていたのはグリムロックだから」
「「えっ？」」
　俺が告げた事実に黄金林檎のメンバーが唖然としていると後ろから声をかけられた。
「見つけたわよ。」
「「グリムロック!?」」
「久しぶりだね、皆」
「なんで……なんでグリセルダさんを殺してまで指輪をお金にする必要があったの!?」
　最もだ。だが、彼がそんな理由で奥さんを殺すとも思えない。その理由を聞くために俺はここまで来た。
「金…？金だって…？――これは売った指輪で得た金額の半分だ。１コルたりとも使っちゃいない。」
「なら、なんで奥さんを！」
「グリセルダは、現実でも私の妻だった。可愛らしく、従順で、一度も夫婦喧嘩をしたこともない理想的な妻だった。だが、この世界がデスゲームとなって彼女は変わってしまった……。死に怯え、怯んだのは私だけだった。彼女は逞しく、立ち向かって行った。私の愛した彼女は……ユウコはいなくなってしまった。なら！ならユウコが私のもの

であるうちに永遠に思い出の中に封じ込めてしまおうと思った私を誰が責められるだろうか？」

グリムロックは早口で捲し立てる。しかし俺に浮かんだのは同情でも、なんでもなく――『憤怒』。

「そんな理由で……奥さんを殺したのか？」

「十分すぎる理由だよ探偵くん。君にも分かる時が来るさ。」

「分かるわけないだろう！愛が殺意に変わるなんてことは絶対に有り得ない！お前が抱いていたのは愛でもなんでもなく、所有欲だ！愛があるならパートナーの新しい一面を見つけてもそれを受け入れて《新しい一面を見つけた。ラッキーだった。》、それでいいじゃないか！今でもグリセルダさんを愛しているならその左手の手袋を外してみろよ！どうせ結婚指輪も棄ててしまったんだろ!?どうなんだよ!!おい!!!」

１５年半生きてきてここまで激昂したことは無いかもしれない。

グリムロックはその言葉に反応し、左手の手袋を外そうとするがその手は空中で震えてまた地面へと戻っていった。

「この男の処遇は俺達に任せてくれるか？」

「……ああ。分かった。」

シュミットとヨルコさん、そしてカインズさんはグリムロックを連れてこの場を去っ

ていった。
　ふうっ、とため息をつくとアスナが話しかけて来た。
「ねえ、どうして君はユウキとランさんを好きになったの？」
「……そうだな。なんて言うか…ユウキはパーティを組んでるうちにいつの間にか。ランは俺が独りでやってる時もなんだかんだ言って声をかけてくれたし、あとユウキと違うところはないかって観察しているうちに……って感じかな？」
「うぅ……」
「あっ…」
　本人たちの目の前で……。めちゃくちゃ恥ずかしい。
「まっ！早く街へ戻りましょう！お腹空いちゃったわ」
「ああ、ん？」
「あぁ……」
　墓の前にはローブを着た半透明に透けた女性が立っていた。この人が恐らくグリセルダさんなんだろう。
　その女性はにこりと優しい微笑みを浮かべると、消えてしまった。
「……じゃあ、行こうか」